

お通じ報告パートナーとの
存在しない青春を夢見た人たちの
アンソロジー

あめもちうず
くろがね囲炉裏
なじゅとりん
できすパド
イースパド



お泊まりひまりと夜うんち

あめもちうず

「ねえ、安全ピンどこにあるか知らない？」

「なんで昨日準備しておかないんだよ……」

寒気も本格的に強まった師走の昼、十二月二十九日の午後二時。

普段は落ち着いているお坊さんでさえ年末は経を上げるために走り回ることから、一二月は師走と言うらしい。

「あー！ 替えの下着足りないかも！」

それならいつも忙しないひまりの年末はどうなるんだろうか。答えはこの通り。

オタクの年末と言えば、コミケだ。

参加すれば話題はそれ一色、参加しなくとも／できなくともS Nのトレンドをかつさうので目に入らないわけがない一大イベントを目の前にして——俺達は明日の一日目に参加するため、準備をしているのだが……。

「まだかかる？」

「うん、まだかかる！」

「なんで自慢げなんだよ」

旅行や遠出のときはいつもこうなんだよな。楽しみすぎて前日準備の詰めが甘すぎて、当日出発する頃になってあれがない、これが見つからない、それ知らない……。

だから手伝おうか前日からしつこく言っていたのに『前のコスプレイベントちゃんときたもん。今回も大丈夫』と薄い胸を反らし

ていばっていた威勢はどこへやら。

そもそも秋のコスプレイベントは初めてのイベント参加ということで、俺がチェックリストを作って念入りに確認していたから余裕を持って出発できていたわけで。自分でできるとお子さまが主張するので任せた結果がこれだ。

ひまりの家で昼食をこちそうになり、ゆっくりアニメを見てからさあ行こうとなったからこれである。手出し無用と言われたのでリビングでひまりのドタバタ劇を高みの見物だ。

前みたいに朝イチ出発でもないし、用心してコミケ用チェックリストは作ってあるから後で点検しよう。肝心要の入場チケットは俺が管理しているので忘れる心配もない。

「準備できたら呼べよ」

「うん！」

予定の出発時間は越えているが、焦る必要はない。何故なら前泊だからだ。俺たちの地域から東京ビッグサイトまではあれこれ乗り継いで二時間前後。その気になれば早朝から出発して入場することも可能だが、初コミケの二人にとって旅程やトラブルのことを思うとややハードルが高い。

そこで、気を利用してくれたひまりママが二泊三日のホテルを取ってくれた上にお金まで出してくれた。大学生にとって繁忙期のホテル代は非常に高く、無理をして早起きしようか悩んでいたところ、ありがたい恵みである。

申し訳なすぎせてせめて半額でもと食い下がってはみたものの、『ひまり一人じゃ心配だから、その分お守りしてね』

と丁重にお断りされたので、大人に甘えることにした。ひまりママはひまりの趣味にかなり好意的——ひまりが元気に活動してくれる源なので、資金面や衣装の裁縫でもかなり力になってくれている。小さい頃から親同士の交流が厚かったので、家族同然で俺にも優しくしてくれるし、俺たちの交際も応援してくれる。しかし親にしてはかなり踏み込んでくるのが玉に瑕かも？ ひまりはどこまで進んだのか聞かれたり、遊んでいるとき頻繁に部屋に来てちよっかいかけられたりするのが恥ずかしい。思春期だ。

別に俺だけ自宅からで、ひまりは前泊でも全然よかったのだけど、好意を無碍にするのもどうかと思うからね。

別に俺は余裕で自宅から早出ができる。

「やっとな準備できた！」

ソシャゲのデイリーを全て終え、いよいよ口出ししようかと思ったところで、ひまりがキャリーバッグとリュックを引っ提げてきた。まだ外にも出ていないのに、うっすらと汗をかいている。

「じゃあチェックリスト用意したから指差し点検しようか」

「えー！ リスト要らないって言ったのに！ 信用してたくない!？」

「家出てから財布ない、ティッシュない、ハンカチないって慌てるの嫌だろ」

「リストが子どもすぎるんだけど！ 大丈夫だってば。そんなに言うなら全部机に並べて見てもいいよ。あ、下着は出して見たらだめだからね」

「はいはい」

ということでコスプレ道具一式から床に広げ、一つずつ確認。衣

装のパーツ一つでも忘れるとせっかくの準備が台無しだ。

しかしコスプレ衣装については欠けの一つもない。さすがに自分で作った愛着ある衣装だけに忘れるなんてドジはやらさないみたいだ。

「当然でしょ」

「ま、まあ当然だよな」

今回の冬コミでひまりがコスプレをするのは、好きなキャラクターであるブルアカのマリーのシスター服。

……初めてのコスプレイベントで身にまとい、マリーを演じたまま恥ずかしい失敗をしてしまった、良くも悪くも思い出のつまった一着だ。

忘れられるはずもない。もう忘れないし、死ぬ間際の走馬灯でいの一番に脳内を流れるに違いない——マリーが、ひまりがウンコを我慢できずに野グソをしてしまったあの光景を。

「ちゃんとクリーニングもしたし、手直しもいっぱいしたよ。他にマリーちゃんしてる人いたら併せとかしたいなあ」

どれだけ洗おうとも、染み付いている記憶は剥がせない。染み付いた匂いが消えようと、俺は見るだけで喉の奥が熱くなる。

ひまりは今度こそちゃんとトイレに行けるだろうか。何万人が集まるイベントで、行列に耐えられるだろうか。今度は野外で潜むところもないのに、我慢ができなくなったら、和式トイレしかなかったら、お腹を壊したら……。

「あっ！」

「どうした？」

よからぬ妄想で劣情を高めていたところに嬌声。よもや脳内を覗かれたかと身構えると、

「ごめん一番大事なことを忘れてた。お出かけ前だからトイレ行っておかないと。うんち、してくるね」

「あ、ああ……そっचा。出そうか？」

「ん、わかんないけどそろそろ出るはずなんだよね。朝もお昼ご飯の後も出なかったから、そろそろすっきりしたいなあ」

お腹を撫で、はにかむひまり。腹腔に大便を溜めてお通じなしをアピールする無邪気な仕草が、やけにいやらしい。

「うくんってしてる間に、他の荷物チェックしていいよ。でもキャリーバッグのこっち側は開けたらだめだからね。お着替えとか生理用品だから」

ひまりは忘れ物チェックを俺に押し付け、お腹を撫でながらトイレへと駆けていった。

……まあ忘れ物というか、外出前には欠かせないことではあった。ひまりはお腹が弱かった頃の名残で、食後や外出前は必ずトイレにこもって排便を試す癖がついている。食後の刺激ですぐお腹がゆるんだり、屋外ですぐトイレに行けない不安でも下したりしていたので、少しでもウンコを出すのと安心を得るためにトイレで踏ん張ることは大事なルーティンになっている。

一二時過ぎの昼食後はすぐトイレに行つて数分こもっていたが、出なかったと言っていたな。前泊のホテルまで約二時間……ゆつくりできる自宅のトイレですっきりしておきたいのは当然だ。

ドアの閉まる音がした。ひまりがトイレに入った。鍵をかけて、

着衣を下ろして、便座に腰掛けた頃だろうか。

気になる。ならないわけがない。

しかしひまりママがすぐ近くでくつろいでいるので、我慢だ。いくら交際を応援されていても、家族同然の仲でも娘の用便に聞き耳を立てている彼氏がいたら気分を害するところではない。

ひまりのウンコに性的興奮を得ているなどと、ひまりママはおろかひまり本人に言えるはずがなく。

今日も薄汚れた心の中に本心を押し込んで押し殺して、常人のフリをして生きていく。

「千尋ちゃん、ひまりがいない内に着替え開いちやえば？」

「母親が娘の下着漁るの推奨するのおかしくないですか？」

「お泊まり用のエッチな下着あるかも？」

「あつたら何ですか……」

やたら含みのあるひまりママに辟易しつつ、煩惱を振り払おうと持ち物チェックを進めるのだった。



そろそろうんち、出るかな。

「うん、うん、うんっ」

ぶっ ぶり ふうううーっ

おならばっかり出る……。

明日は楽しみにしてた冬コミ、それも一日目はコスプレ参加ができるからずつとずつとワクワクしてたんだよね……。

「ん〜っ、うん、うん、う〜んっ」

ぶっ ぶす ぶすぶすぶす

最後にうんちが出てからもう五日くらい……。おなか張っててガスばかり。うんちが溜まって膨れたおなかでコスプレするのやだな……。それに、コスプレ中に急におなか痛くなってうんちしたくなるの、やだし……。

絶対にうんち出し切ってからコミケ行きたいんだけどな。六日もお通じ来ないなんて滅多にないんだから、今日か明日に出るはず。できれば今日がいいな。

「うーん。うーんっ。う〜ん……」

おうちでうんちチャレンジできるのは今が最後。うんちのためにトイレにこれで五回くらいこもってるのに、欠片も出ない……。一番うんちしたくなる朝食後と昼食後におならしか出なかったのに、便意がないタイミングでこもっても仕方ないのはわかってるけど。

「うん、んっ！」

ぶりっ!! ぶうーっ!

あっやだっ、大きい音のおなら出ちゃった……。

千尋くんはリビングにいるから聞こえないと思うけど、廊下を挟んだ向こうで待ってると思うとちょっぴり恥ずかしいかも。

はああ、うんちが出ればガス抜きでこまめにトイレ通うこともないんだけどな。マリーちゃんの格好でおなら我慢して、注目を集めるときにおならしちゃったら顔向けできないよ……!

「はあ……っ」

コスプレのこと。トイレのこと。おなかの具合のこと。こうやっ

てトイレにこもってコスプレのことを考えると、嫌でもあの日のことを——マリーちゃんの格好でお外うんちしてしまった、初めてのイベントのことを思い出しちゃう。

朝からうんちが出なくて、やっと出そうだったのに和式便器が嫌だから我慢して、我慢できなくなってたのに多目的トイレも遠慮して、空いてる座れるトイレを探して外をさまよって、うんちが漏れそうになって、頭が真っ白になって、公園の奥で、うんち……。

「はあ。はああ〜。ううー……」

トイレで悶々。

あの日から結構時間が経ったのに、未だに傷が癒えた気がしない。おなかの失敗は大小様々経験済みだけど、大学生にもなってトイレまでうんち我慢できなくて……。うん、和式トイレが嫌だからってワガママ言っただけで野グソなんて、マリーちゃんがどれだけおなか壊しても絶対しないよお……。

他の人にはバレなかったし、ちゃんとお片付けもしたけれど、あんな幼稚な大失敗を忘れることなんかできるわけないし。

「いたた……。うう、きつつ」

おなかを擦るとおへその下あたりにごっごつした固い感触。お便秘のうんちが腸と皮膚を押して、ぱっぱつに張ってる……。

できれば今日に出さないと……。だけどおなかを下すくらいなら、便秘のままの方がマシなんだよね。

おなか下したら一日に何回もトイレ行きたくなるし、五分とか一〇分とかトイレから出られなくなるし、急にうんちしたくなってコミケの行列トイレの真ん中で間に合わなくなるぐらいなら……。で

も便秘のときも急にしくなつて、漏れちゃいそうにもなるし。

「はああ。うん、うん……。うんっ……！」

絶対にすっきりしたい、うんちいっぱい出して、楽しくコミケ、コスプレ、マリーちゃん……。

「うーん！ うんう、んっ！ うんち、うーんっ！」

ぶぶ ぶびっ ぶうっ ぶすう……っ

ただどうんちがちつとも出ない……。おへその下で大きいのが溜まって栓になつてるのはわかるのに、おなか動かないから全然進んでくれないみたい。

「うん、うんっ、うん、うー……うーんっ！！」

ぶう ぶすー ぶすう……

「ん……！」

ぶび……ぶりぶりぶりぶうー……っ！！

ぶうっ

「はああ……もおっ」

うんち、やつぱり出ないみたい。

無理して踏ん張つてたらお尻痛くなるし、諦めよ。

おしっこしたからちゃんとお股と、おならもたっぷり出たしお尻も拭いて、おしまいっ。

「お待たせ……」

五分ぶりにトイレを出てリビングに戻ると、荷物チェックが終つて花丸が描かれた紙がテーブルに置いてあつた。

「ほらー、ちゃんとできてたでしょ？ ひまりを侮ると痛い目に合うんだからね」

「直前になつて慌てたのは？」

「ちゃんと揃つたんだからいいじゃん」

小うるさい千尋くんを適当にあしらひ、荷物を詰め直す。下着とが入つての方の収納スペースは触つてないみたい。まあママが見てたからできるわけないよね。

お家でうんちは済ませられなかったけど、ホテルのお部屋で好きなきにこもれるし、お外で催したら恥ずかしがらずにちゃんとトイレ借りて、すっきりしよう。

「よし、行こ！」

「予定より三〇分遅れだけど、まあいいか。ひまりママもホテルの予約とお金、ありがとうございます」

「いいのいいの。二人で、うん、二人で楽しんでね」

「はあい。行つてきまーす！」

コミケ前日の娘よりもご機嫌に見えるひまりママに見送られ、俺たちは大きな期待とわずかな不安を胸に伊澄家を出発した。



電車を二回乗り継ぎ、途中でひまりのトイレ休憩（長め）を挟みつつ、もう一本電車に乗つてホテルの最寄り駅へ。

ひまりママが予約してくれたホテルは駅から徒歩五分の好立地で、道もシンプルで迷いづらい。お守りがいるから大丈夫だけど、これならひまりも安心だ。

ホテルは全国に何百店舗もある有名チェーンで、フロントロビー

はチェックインする人たちが賑わっている。予約はひまりの名前で取ってあるので、ひまりにチェックインを任せて後ろで見守ることにする。

「今日から、えっと二泊で予約している伊澄……はいそうです。チェックインお願いします」

やや緊張しながらもチェックイン作業を進める姿を、保護者ばりに見守る。……彼女に面倒な作業をさせているアレな彼氏っぽくてちよつと嫌だな。そそくさと隣に立ち、参加したフリ。

「ふんふん、チェックアウトは明後日の朝一〇時で、えっと、」

「チェックアウト後も荷物預かってもらえるって聞いたんですけど、そうです、大きい荷物だけで」

コミケは二日目も一般参加する予定なので、キャリーバッグなどは預けて遊びたい。そのためにチェックアウト後でも荷物を預かってもらえることは調査済み。チェックイン時に確認して万全だ。それと彼女任せ男のレッテルも回避。

「ふう、チェックイン終わったあ。初めて自分でやったから、ちゃんとできてよかったっ」

「成長したね」

「子どもじゃないから撫でないで！ えっと、部屋は八一六号室だつて。ん？」

受け取ったルームキー二枚と、部屋の情報が印字されたレシートを交互に見るひまり。

「あの、一部屋分しか書いてないんですけど……」

「はい。伊澄様は二泊三日で二名、ツインルーム一部屋での予約を

承っておりますので、合っていますよ」

「ひとへや？ ツイン？ え、ええええええっ！」

ああわかった、わかってしまった。

ひまりママが説教的にホテルを押さえてくれた理由を、宿泊代を全て出してくれた意味を。

「千尋くんと同じ部屋で二泊なの!」

ずっとニヤニヤして見送ってくれたのが、あまりにも余計すぎる親心の表れだということを……。



予約はどう折っても一部屋でしか取られないこと、ホテルはもちろん満室であること、そして今から別々二部屋を確保することなど金銭面でも年末という意味でもかなり難しいこと。

ママのおせっかいにもものすごく頭痛がするけれど、わたしたちは同じ部屋で二泊することを受け入れた。

千尋くんは「別に俺はいいけど」ってしれっとしてたけど、内心は恥ずかしいに決まってる。いくら彼氏彼女だからって、準備もなしに狭い部屋で二泊もするなんて、恥ずかしいよ……！

わたしは恥ずかしいよ！

エレベーターで八階まで上がり、壁の案内に従って八一六号室の前へ。どう見てもドアは一枚。

千尋くんがドアのカードキー部分にルームキーをかざして開錠、わたしと違って緊張していないのかずかずかと入っていく。

「もしかしてママと結託してない？」

「それはダウト。俺だってシングル二部屋取ってくれてると思ってたんだから」

そ、そうだよ。ツインスルーム一部屋って判明したときに頭抱えてたもんね。千尋くんも思春期のエッチ男子だから、突然ひまりと同じ部屋でお泊まりと知ってドキドキしてるに違いないよ。

「でもさ、お泊まりが初めてなわけじゃないだろ。見ず知らずの男女ならともかく、俺は普通に楽しみだけだ」

「まあそうだけど、でもお泊まりだってママとか大人の人の人だし、子供のときだし、ちよつと今と違うじゃん」

ツインスルームはホテルのホームページで事前に予習した通り、最低限の家具やスペースが揃ってるだけのビジネスホテルって感じの部屋だ。予習と違うのはベッドの数。

シングルサイズのベッドが二つ、最低限の隙間を開けて並んでいる。これがダブルじゃないのはママの優しさなのか、それとも……。

「ひまり、ベッドどっちがいい？」

「別にどっちでもいいよ」

備えられた寝具も、大きさも同じ。違うのは出入り口に近いか、窓に近いことだけ。どちらかと言うと窓側の方が日光浴びられていいかな？

「トイレ使っていいか？ ひまりがしたいなら先入っていいよ」

「ううん、大丈夫。ごゆっくり」

千尋くんは通路に荷物を置いて、出入り口横の部屋へ……ユニットバスルームへ入っていった。

このホテルは大浴場ないから、お風呂入りたいときはそこでシャワー浴びないとなんだよね。鍵かかるからいいけど、着替えとかお風呂上がり見られるの恥ずかしいな……。

彼氏と彼女なんだから、いずれはそういう機会があるんだろうけど、まだ早いよ。キスだってしてないのに。

まあたつた二泊だもん。シャワー浴びるのも二回だけ。お着替えのときはユニットバスの中ですか、千尋くんは廊下に出てもらえばいいんだから。

そういえば千尋くんトイレ使ってた……あつそつ、ユニットバスだからお風呂とトイレ一緒なんだ。ん？

なんかユニットバスの方からじよぼじよぼって水の音がする。え、これってまさか、千尋くんがおしっこしてる音!?

ユニットバスから遠い窓側のベッドに腰掛けてるのに、おしっこの音こんなに聞こえるの!?

「はあ」

おまけにすっきりした感じの溜め息まで筒抜け！

おしっこだけでこんなに聞こえるのに、おならとか、ましてやうんちなんかしたら、絶対大きな音が響いちゃう！

一人のホテルだからいつでもゆっくり、思いっきりうんちできると思ってたのに！

「窓側のベッドにするのか？」

事態も知らない呑気な千尋くん。ベッドに腰掛けてわなわな震えるわたしは、

「おトイレ側のベッドがいい！ 千尋くんは窓側ね！」

こんなに壁が薄いんじゃないやゆっくりうんちなんてできないっ！
ぜ、絶対にロビーかお外のおトイレでうんち済ませないと……。

千尋くんとうんちの音、聞かせられないんだもん!!

「ひまりがうんちするとき、ぜったいに外に出てね!!」

「あ、音か……。おう……」

ばつが悪そうに気圧される千尋くんが悪い気持ちはありつつも、
乙女の羞恥心は飲み込めないのです。



「ちよっとトイレ……」

座っていたベッドから立ち上がり、テレビのリモコンを取って音量を上げる。ちよっとうるさいくらい……部屋が音で満たされるぐらい、跳ね上げる。

ちょうど部屋のテレビでゲーム大会の配信を試聴していたので、騒がしいBGMや実況解説でこれから出す音や声がかき消される、はず。アニメだったらお話がわからなくなるから止めないといけなけれど、生配信は流しっぱなしだから大丈夫。

時刻は午後一〇時。旅の疲れで眠くなってきたけど、配信してるゲームが二人とも大好きな懷ゲーで、さすがに最後まで見たくてがんばってる。あれこれ作戦を立ててやっとクリアした高難易度ステージが、流れ作業で最速クリアされていくのは目が離せなくなっちゃうよね。

そんな楽しい時間も、もう少ししたら千尋くんが隣にいるのに眠

れるのになって気になったり、いびきかいてびっくりさせちゃわなくなつて不安になったり、……夜中におなか痛くなつてトイレ行きたくならないかなって、そわそわしたり。

部屋のユニットバスルームはわたししが占拠したベッドのすぐ隣。さつとドアを開け閉め、しっかりと鍵をかけて指差し確認。わたしが入ってるってわかってるのに、千広くんがドアノブがちやがちやるはずはないけれど、いたずらで電気消して怖がらせてくるかもしれないからね! 脅かすつもりでドアノブ回してドアが開いちゃったら大変だもん。

「んしょ」

パジャマのズボンとショーツを一緒に下ろして、着座。ちゃんと温水洗浄つきの暖房便座なのが嬉しい。ホームページの客室紹介で全室温水暖房便座完備って謳ってて心踊ったもん。

冬なんだしあったかい便座でゆったりおしっこしたいよね。うんちの後はおしっこお尻洗って、きれいにしてお出かけしたいよね。

それはそれとして、千尋くんと一緒にのお部屋のトイレでうんち、できるかな……。

「はあ」

しよわ じよろろ ちよろろろろろ じゅおおおおつ
ぶしつ ちよぼぼぼぼ……

一時間ぶりのトイレだけど、夕食のファミレスでドリンクバー堪能したからおしっこはそこそこ。万が一にもおねしょできないし、消灯直前にももう一回おしっこしておかないと。

「ふう、っ。……」

耳を澄ませてみる。

ユニットバスルームの薄い壁の向こうから、大きな歓声とゲームクリアのSEが聞こえてくる。一応壁とドアで遮られた密室にいるのに、配信で何が起きているのか鮮明に聞き取れちゃう。

ということは、トイレ中に大きい音出したら部屋まで響いちゃうかも、ってことだよな。

「……、っ」

ごろ ごろ ごろろろろ ゑゆるるる

ぶ ぶび ぶす

トイレの主目的はおしっこじゃなくて、ガス抜き。

便秘が長すぎて、どうしてもおならが我慢できないっ。

それも、とつてもくさいやつ。

「んう。ん。んふ、っ」

ぶう ぶすー ぶすーっ ぶぼぼぼ

慎重に、集中してお尻の穴をゆるめ……体温を吸った気体を空中に解き放っていく。

ゆるめすぎたら破裂音。しめすぎたら笛の音。お尻をこじ開けようとすると気圧に逆らわず、だけど無駄に跳ね除けず、じわじわとおならを出す……。

はあ、本当は気兼ねなくぶりぶりしたいんだよね。気持ちだけでもすっきりするし、勢いでうんちしたくなるときもあるし。お部屋なら、お家のトイレなら遠慮しなくていいけど……千尋くんにおならの音を聞かれるのはやだっ！

女の子なのにぶりぶり汚い音を立てるの、恥ずかしいもん……。

だからって水を流して音消しもつたないし、何度もコックひねってごまかすのもおならやうんち出まくってますアピールみたいで余計に恥ずかしい。

おしっここの音はそこまで恥ずかしいから気にせずしてたけど、聞かれたりしてない、よね。

「はあ」

ごろろ ゑゆるる ゑぼごぼごぼ

うう、おなかぎゆるぎゆるしてる。ぱんぱんになったおなかの中で、あつついガスが動き回って気持ち悪いよ……。

「んうー、ん、んっ。んうう、んっ」

ぶうー ぶび ぶびびび ぶりっ ぶっ

ぎゆるるるるっ！

ぶうーっ

「んいつ、んっ！」

おなかを擦りながらおならをすかしている途中で、急におなかぎゆるぎゆるして肛門のコントロールが乱れ、膨れ上がった腹圧が均衡を崩して排泄欲が爆発——。

「んっ！」

ぶうーっ！ ぶりぶりぶりぶり！ ぶううう~~~~っ！

だ、だめっ！ 汚いおならの音、千尋くんに聞かれちゃう!?

「ふうーっ！ んぎい、んぐ、んんううう」

ぶびぶびぶりぶりぶ、ぶっ ぐぼ ごぼぼぼぼっ

ぎゆるごぼぼぼ……

誰が聞いたって不愉快になるし茶色い想像をしちゃうブリブリ音

が拡散し、顔が一気に熱くなる。かろうじて肛門を締め直して高温ガスを押し返したけど、余計におなかを刺激されて苦しい、っ。

き、聞こえてないよね!?

テレビの音は上げたし、千尋くんは窓側にいるからおならの音が届いてない……と思いたいけど。う、うう~~~~っ!

「はあぁ〜さいあく」

ぎゅるごろごろごろ ごぼぼ ごぼ

跳ね返したおならがおとなしくお腹の奥に戻るはずがないので。

ぶび ぶびぶびぶび

ぶう~~~~~……っ

「ちよっぴり、すつきり……っ」

ずっと腹痛を発してわたしを苛んでいたおならを出し切り、一息。

がらがら びりっ

うんちは出なかったけどおならの後は拭いておかないとかゆくなるから、紙を取ってお尻を拭く。おしっこもしたから前も拭き拭き、

一回で終わり。

「はあ」

うんちが出ないから溜め息ばかり出ちゃう。

明日、出るかな。早起きして、ロビーのトイレこもってがんばろうかな。朝食バイキング食べ終わったらおなかも反応するはずだし、

うんち出るよね。

ぎゅるる

「うう」

おなか痛い、ガス抜きしたばっかりなのになんかぐるぐるして

る。踏ん張ったらうんち出るかな。でも出なかったら、疲れるだけだし。朝の食後便意待った方がいいよね。

床のマットに落としていたズボンとショーツを穿き上げ、蓋を開

めて水を流す。

ホテルに着いてからガス抜きだけで六回、シャワー中とかファミ

レスから戻ってきてロビーのトイレこもったりとか、隙を見てこっ

そりうんちも踏ん張ったのに成果なしなあ。

想定通り別々の部屋だったらずっとトイレこもれるのに。お母さ

んつてば変な気を聞かせて、もう知らないっ!

昔はお互いの家でお泊り会とか、千尋くんのパパママと一緒に旅

行とかいっぱい行ってたけど、高校生になってからはそういう機会

もなかったよね。

普通の彼女彼女なら一緒にお泊まり、仲良く夜ふかし、電気を消

したらそれとなく同じベッドで——。

そ、そういうのはわたしたちにはまだ早い!

桜萌ちゃんは毎週彼氏さんの家に泊まって遊んでるみたいだし、

日向子ちゃんも明言しないけど年上のパートナーさんがいて、いい

感じっぱいし。わたしも大学生らしい、大人っぽいお付き合いた

いんだけどな。

どうしても幼馴染の距離が抜けなくて、キスとかエッチとか意識

すると、頭の中がいつぱいになっちゃう。

そういうコト、千尋くんも期待してるのはなんとなくわかるんだ

けど、無理なものは無理っ。

もう少し慣れてから、キスもまだなんだし……。

ユニットバスルームを出て、とぼとぼと自分のベッドに座り込む。

「おならいっぱいしたから、しばらく入らないでね」

「わかってるって」

「わかってるの!? もしかして、聞こえてた?」

「え、いや、何も聞こえなかったけど。長かったし、出たって言わないし」

「あ、うん……」

なんか気まずい。

そういえば桜萌ちゃんも『彼氏と遊園地デートしてお泊まりしたんだけど、エッチの前にウンチ我慢できなくなって雰囲気サイアクになっちゃった』って教えてくれたっけ。いいムードのときに長時間トイレ離席したら、そうなるよね……。

普通の彼女彼女も、お泊まり中に女の子がうんちしたら、そんな雰囲気になるのかな……。私はうんちするって言えるし、うんちした後もちゃんと報告できるけど、というか報告しないとなんか落ち着かないからいつも千尋くんが『うんち出たよ』って言うんだけど、やっぱりうんちしたい／出たって普通は言わないのかな。

「……そろそろ寝ようか」

「あー、ちょうどゲーム終わったんだ。そうだね。明日早いし、眠いし」

千尋くんがミラーリングしていたタブレットを片付けている間に、わたしも寝支度。化粧水で保湿して、アイマスクと耳栓も準備。寝れないとき用で買ってたけど、千尋くんがすぐそこについて緊張するから欠かせない。

寝る前のおしっこは……さっき済ませたから大丈夫だよ。

「はいおやすみ! アラームかけた? ひまりのことちゃんと起こしてね!」

「うわ早い。そんなに眠かったのか……」

ぼーっとしてたら千尋くんのこと気になって一睡もできないまま朝を迎えちゃいそうだから、眠気が消える前にお布団!

彼氏と初めての夜なのにこんなのでいいのかな。

いいの!

明日コミケなんだから!

早く寝て、起きて元気にコミケっ!

だから、ねむ——。

……。

れなかった。

千尋くんが電気を消してくれて、何時間経っただろう。

何十分? それともたった何分?

千尋くんが背中を向け、布団の中で丸まっているのに向に目蓋が落ちない。あくびは出るのに、眠くならない。

もう千尋くんは寝たよね……。

どうしよ。寝ようと思って意識するほど、眠気が遠のいていく気がする……。明日は大事なコスプレ参加なのに、寝不足で救護室のお世話になるわけには……。でもお。

やっぱり、緊張して眠れない。それに……

ぎゅるるる

ごぼっ

うう、おならしたくなってきた。

おなか痛い……。

お便秘が極まりすぎて、横になってるのにずっとおなかが痛い。それにおならもしたくなって、おなかパンパンで苦しいよ……。

「んっ、んう。ん……ふうう」

ゴロゴロゴロ……ぐるぐるぐる……っ

あとね、うんちしたい。

うんちがしたい、うんち、うんち、うんち……っ。

「ん、んっ……おなか、いたいよお」

今になってうんちが出そうになってきた！

トイレ行きたい……っ！

今日起きてから寝るまでトイレに入った回数は一〇回越え。コミケ前にうんちを済ませようと思って何度もこもったのに、出たのはおならばかり。それなのに。

どうして今になって……うんちしたくなるの!?

ひまりとハロウィンと夜トイレ

ななじゅ

ハロウィン。それはかつて西洋では収穫祭あり、現世と霊界の扉が開くと信じられた宗教的な意味合いを持った祭りであった。霊界からやってきた悪霊に気付かれないよう、動物の毛皮や骨で仮装するという風習が、いつしか子供たちがお化けや怪物の仮装をしてお菓子をねだって歩く祭りへと変わり、やがて近代日本で一大コスプレイベントデーへと姿を変えてきた歴史がある。

「ハロウィンコスプレイベント、楽しみだね。千尋くん」

「だな。毎年かなり盛大にやってるみたいだし」

ここにも一組、ハロウィンのコスプレイベントを楽しみにしている二人組がいた。千尋とひまり。幼馴染同士であり、同じ年であり、同じ大学に通う典型的で理想的なカップルである。

「それで、衣装の最終確認。やるんだよね？」

「もちろん。ちゃんと用意してきてるよ」

千尋の質問に笑顔で頷いたひまりは、持っていたバッグを胸の高さに掲げた。

「着替えるから、向こうで待ってて？」

「はいはい」

ひまりに言われて、千尋は席を立ててキッチンに続く扉を開けて、玄関横のトイレと隣接した風呂場の中に入っていく。

ちなみに二人が今いるのは、千尋が暮らしているアパートだ。そ

のアパートは単身向けで、部屋はリビングとキッチン、そして別々になっている風呂とトイレだけ。風呂には脱衣場もないため、ひまりが着替えるときはいつも千尋がトイレか風呂に追いやられてしまうのだった。

浴槽の縁に腰掛けてスマホの画面を眺めながら着替えが終わるのを黙って待つ千尋。

「終わったよ」

程なくしてひまりに呼ばれて、リビングへと戻る千尋。

「どう、かな……？」

「へえ……すごい可愛い。今回ののもよく似合ってるよ」

「ふ、ふふ……そう、かな……？」

あえてどもつたような特徴的な喋り方をして、はにかむひまり。

黒と紫を基調にしたゴシック風の蜘蛛の巣が意匠化されたワンピース。手をすっぽり覆い隠すほどに袖の長いアームカバー。そして頭や手足に巻いた包帯と、目玉や髑髏、カボチャをモチーフにしたホラーチックだがポップでチャーミングでもあるアクセサリー。そして何より特徴的なのが、右目が隠れる長い前髪のウィッグ。

「すごいすごい。完璧に小梅ちゃんだ。再現度高いな」

大人気アイドル育成ソーシャルゲームの「デレマス」に登場するアイドル、白坂小梅のコスプレだった。

ひまりはアニメやゲームが大好きな、所謂サブカル女子。ハロウィンのコスプレも、ただのお化けやモンスターといった仮装ではなく、大好きなゲームの登場キャラクターになりきろうと計画していたのだった。

「えへへ……プロデューサーさんにそう言われると……照れちゃって、爆発しそう……」

「おお、口調も完璧だな」

千尋をゲームプレイヤーに相当するプロデューサーに見立てて、照れたように微笑むひまり。

個性派アイドルが粒ぞろいのデレマスにおいて、小梅はホラー全般やスプラッタ映画などが趣味で靈感もあるというアイドルだ。性格は少し内向的で人見知り、しかしホラー好きをとにかく前面に出して、趣味のこととなればかなり積極的なキャラクターだ。

今ひまりが着ている衣装も、ハロウィンガチャで実装されたもので、ハロウィンコスプレイベントで披露するには打ってつけのものだった。

「目玉とか髑髏とかジャックオーランタンもうまく作ったな。怖くなかったか？」

「これくらいは全然怖くないよ。むしろ愛着湧いてちよつと可愛いよね」

千尋が髪についた目玉やカボチャのアクセサリを指先でツンツンと突きながら、少し意地悪っぽくひまりに訊ねる。ひまりは少し頬をぶくつとさせて口調を本来の自分の物に戻しながら、千尋の指ツンから逃れるように頭を振った。

ひまりはホラーは絶対ダメというわけではないが、どちらかと言えば耐性は低い方だ。流行っているからといって話題のホラーゲームに手を出して後々精神的ダメージを負ったり、千尋がプレイしているゾンビゲームを横で見ていて大声を上げてリアクションしたり。

にも拘らずホラー大好きアイドルである小梅のコスプレをやるうとしたのは、ハロウィンにベストマッチしている衣装とキャラクターだからという安易な理由ではない。

「小梅ちゃんって、好きなものを堂々と好きって言うって素敵だね。可愛いのにカッコいいっていうか、憧れちゃう」

ひまりは今でこそコスプレイベントに参加するようになったが、高校生の頃まではコスプレをしても鏡に写したり千尋に見せるばかりで、イベントに参加することはおろかSNSなどで他人に公開することさえしていなかった。自分の好きを表に出すことが苦手だったひまりは、自分の好きを堂々と表現している小梅に憧れにも近い感情を抱いていた。二百人に迫るアイドルを有するデレマスの中でも、特に一推しのキャラであった。

「あと歌も良いよね！ 可愛い歌かと思ったら転調でホラー調になったり、かと思ったらロックな歌も歌えるし、ホント最高！」

「うんうん。ひまりの小梅ちゃん推しはわかってるから。あんまりハッスルしたら腕に巻いた包帯緩んじゃうぞ」

「わっ……千尋くん、巻いて巻いてっ」

「はいはい。こういうのって、ピンかなんかで固定したほうがいいんじゃないか？」

「うーん……もともと緩めに巻いたデザインだから、やっぱり見えづらいところで止めた方がいいのかな。当日までに調べておくね」

千尋に緩んだ包帯を巻き直してもらってから、改めて姿見に写して自分でも確認をしていく。包帯が緩みやすいことを除けば、他はかなり出来ではないだろうかと思ふ。これなら衣装の手

直しは必要なさそうだ。包帯の改善だけで、衣装は完成としてよさそうだ。

「千尋くん、現地のお宿の方は大丈夫だよな？」

衣装の確認を終えたら、次はイベント当日の宿の確認だ。

ハロウィンイベントというだけあって、開催は夜である。終わってから急げば電車に乗って帰ってこれなくも無いが、近年のハロウィンというのは浮かれた若者たちが深夜までごった返して、思うように身動きが取れなくなってしまうものだ。そこにコスプレイベント帰りのお客が混じれば、公共交通機関を予定通りに使えるかも定かではない。そのため、今回のイベントは泊りがけにしたのだ。

「ああ。ちゃんと予約できてるぞ。会場から徒歩三十分のビジネスホテルを二部屋。早めに予約したとはいえ、選択の余地が無かったからあんまりいい部屋じゃないけど」

そして泊まりを考えるのは彼らだけではない。他の参加者も似たような考えなのは当然で、周辺の宿は軒並み全滅していた。会場から徒歩三十分というのは遠くはあるが、きちんと二部屋取れただけマシだろう。

彼らはカップルだが、その関係は非常にプラトニックである。付き合ってもうだいたいお経つが、セックスはおろか手を繋ぐ以上の接触も無い健全すぎて逆に不健全なのではないかという程の関係なのだ。

当然、泊まりと言っても同じ部屋に泊まるわけもない。宿が遠くなったのも、近くにあったラブホなどの不健全な施設を排除した結果であった。

「あと、ビジホだから風呂とトイレは一緒になってるけど、そこは

目を瞑ってな？」

「うーん……できれば別が良かったけど、仕方ないよね……」

ひまりはお腹の具合に一癖抱えた娘である。便通が不安定で、常便秘気味。また幼少期の排泄トラブルでトラウマめいたものも抱えており、とにかく用足しに難儀する。

にも拘らず、洋式トイレでないとうんちが出来ない。トイレと風呂は別がいいなどという細かいこだわりをいくつも持っている。

「我慢できるか？」

「うん。トイレは洋式だよな？ 最低限、それなら大丈夫だよ」

聞き分けがよいような態度で頷くひまり。もしそれで不満だと言おうものなら、他の条件を緩めてくれればいくらでも選択肢はあるのにと想ったが、千尋はそれを口にはしない。

例えばもつとグレードの高いホテルにすれば。でも、自分の趣味はバイトでやりくりしている大学生である二人に、そんな贅沢を余裕はない。例えばラブホであれば、古くさいところでも選べる限り、今日日はほとんど風呂とトイレは別だし、何ならビジホなんか比喩物にならないくらいに設備も充実している……らしい。だが、健全な成人同士の恋人らしい行為を一切許してくれないひまりが、同じ部屋で寝泊まりするのを、それもラブホという施設なんかを赦してくれるはずもない。

そういうわけで若干我儘なようにも聞こえるが、このくらいの彼女の我儘はまだ可愛い方であろう。尤も、彼氏としては、男としてはヤキモキするものがないわけでもないが。でも、別部屋とはいえ泊まり自体は許されたのは大きな進歩だろう。

それにやっぱり、ひまりが楽しんでコスプレイベントに参加してくれて、自分も一緒に隣にいれるというのは幸せなことだ。

「うん。楽しみだ。いっぱい楽しもう、ひまり」

「そうだね。当日が待ち遠しい！」

衣装の最終確認と当日の簡単な打ち合わせを終えた二人は、カレンダーに記された赤い丸と『コスイベ』の書き込みを眺めて、期待に胸を膨らませたのであった。



来たるハロウィン。夕暮れ時から次第に街は活気に溢れ、至る所で様々なコスプレをした人々で賑わうようになってきた。そんな街の中心部から離れ、やってきたのは都市郊外にある大型遊園地。週末や連休ともなれば家族連れやカップルで賑わうこの遊園地が、今日のハロウィンコスプレイベントの会場である。

主催がもとも二次元コスプレイベントをメインとしている運営のため客層もオタク寄りで、所謂ハロウィンらしい仮装よりも二次元キャラのコスプレが圧倒的に多い。遊園地でコスプレが出来て、コスプレのまま園内を歩き回ったり、アトラクションに乗ることもできる。普段は出来ない撮影もできるとあって、非常に多くのコスプレイヤーが集結していた。

「すごい混んでるね」

「遊園地ひとつをレイヤーたちで貸し切ってるみたいで圧巻だな」

二人は集まった人々、レイヤーやカメコや一般参加の人の群れを

見て圧倒されそうになりながらも、見知ったキャラクターのコスプレを見つけたのに楽しそうにはしゃぎながら、受付を済ませる。

「ひまり、トイレは大丈夫？」

「更衣室のすぐ近くにあるから、そこで済ませようかなって。ほら、あそこ」

キャリーをゴロゴロと引きながら、行く手に見えてきた更衣室に割り当てられた建物とその隣にあるトイレを指さすひまり。やはりというかなんというか、女子トイレの方にはすでに短くはない行列が出来ている。コスプレ衣装を着たもの、私服のもの、コスプレとは縁遠そうだが興味深そうに周りを見渡している母娘連れ。千尋がレイヤーで貸し切ってるみたいだといったのは、あくまでたとえ話だ。あくまでイベント会場として園全体が開放されているだけで、一般のお客さんも多い。ただのコスプレイベントよりもトイレが混みがちなのは、仕方がないことだった。

「大丈夫そう？」

「うん。今日はおうち出るときにちゃんと出たから。でも、まだ出そうな感じがするから、ちょっと頑張ってみるかも」

「そっか……じゃ、荷物は預かってくから」

「ありがと〜」

ひまりのいつものうんち報告。それは今日の出がけも、しっかりと報告を貰っていた。今日の朝は三日ぶりの便通があつて、お昼ご飯を食べたあとにも一回。合計二回で、朝はカチカチのお便秘うんちで、昼は少し柔らかくなったバナナうんち。それだけ出していれば、以前のような緊急事態に陥ることはそうそう無いだろう。

千尋はひまりのコスプレイベント初参加の時のハプニングを思い出して、股間が熱くなるのを感じていた。ひまりは初参加したイベントで野外排泄を、野糞を経験することになったのだ。

そして千尋はそんなひまりの姿に興奮を覚え、犯してはならない禁忌を犯してひまりのうんち姿を隠し撮りして、一生消えないであろう背徳的な感情と衝動をはっきりと自覚するに至った。

「……駄目だ駄目だ。今はそんなこと考えてる場合じゃない」

千尋は頭を振って冷静さを取り戻し、股間の熱を抑え込める。自分の性癖は自覚したが、それと同時にひまりへの想いも単なる劣情だけではない純粋な愛情であるとも自覚しているつもりだ。ひまりが楽しみにしているイベントの最中に、邪な気持ちを抱くべきではない。そう言い聞かせて、心頭滅却するように夕暮れが薄闇に変わっていく空を見上げる。

ハロウィンは収穫祭であり、降霊祭であり、そして冬の訪れを告げる祭りでもある。見上げた空、そして薄闇に包まれていく空気は、冬の訪れを感じさせるものであった。

「……今日も冷えそうだな」

何気なく呟いたその一言。冬の寒さは、確実に迫ってきていたのであった。

一方、ひまりがトイレの行列に並ぶこと約十分。ようやく自分の番が回ってきて、ひまりは個室の中へと入って扉を閉め、鍵をかけた。遊園地というだけあって、トイレの中は清潔に掃除が行き届いているし、六つある個室はすべて洋式トイレだった。

「ふう。洋式トイレでよかった。匂いは残っちゃってるけど、掃除は行き届いてるし」

ひまりは安堵した様子でワンピースの中からベチパンツと下着を降ろす。現れたのは、黒いショーツだ。サイドがレース地になっていて、うっすら透けている。勝負パンツだと思われても仕方がないセクシーなデザインのは、小梅をイメーजして用意した衣装の一環だ。小梅は体格こそひまりと似て年不相応に小柄だが、厳ついピースを付けていたりとファッションは比較的派手である。そんな小梅がシンプルなショーツは選ばないだろうと妄想を膨らませて、このショーツをチョイスした。見ないところにもこだわることでコスプレの完成度を引き上げる。それがひまりの信条だった。

「ん、しよっと」

便座に腰を下ろすと、ほんのりと温かい便座がお尻を迎えてくれた。もぞもぞとお尻を揺すってベストポジションを探り出すと、全身の力が程よく抜けて、それに伴って尿道口が広がっていくのを感じる。

しゅいしゅいっ!! シュウウウウ——……じよばばばばっ!!

「はふう……」

周囲が肌寒いせいか、奇妙なまでの熱を感じながらおしっこ放水が始まった。勢いよく噴き出したおしっこがほぼ垂直に便器の底へと注ぎ込まれて、激しい水音を立てる。

おしっここの勢いが次第に弱まってきたところで、ひまりはお腹に

手を当ててそつと撫でる。

ぐる……ぐるるる……

確かに感じる微かな腸の蠕動と便意の流動音。まだ出そうな感じがしたのは、勘違いではないようだった。ひまりはその衝動に息を合わせるように、大きく息を吸い込み、そして吐き出した。

「すうう……はあ……んっ。んんんっ、ううん……っ」

にち……ッ!! みち、みちち……ムリュウウ……ッ!!

肛門粘膜を押し広げる音。粘着質な流出音。そして肛門に感じる、ほんのりとしたぬくもりと異物感。今日三度目ともなれば、硬い便はもうお腹の中には残っていないかった。ひまりの息みに素直に応えてくれて、普段の難産ぶりが嘘のように軽快な排便が始まった。

「うん……っ、ふうっ。うんっ、んん——っ」

むりゅっ!! ぶりぶりぶりぶりぶりっ!! ばちやばちゃんっ!!

むりりりッ、ブリリリリ——ッ、どぶんっ!!

ブリュリュッ、ブリッ、ぶりゅぶりゅぶりゅ……ばちゃんっ!!

「はあ……っ」

一つ目のうんちがお尻から離れると、ぽっかりと広がった肛門がヒクヒクと蠢き、すぐさま次のうんちを押し出してくれた。そう

やって便意に身を委ねて息が続けること数分。割と長めのうんちを合計三本放り出して、ひまりの肛門はすとと静まり返って窄まっていた。

「ふ……スッキリしたあ」

ひまりが股間を広げて便器の中を覗き込むと、茶色くて大きくて長いバナナうんちが折り重なるようにして水の底に沈み、最後の一本だけが水面から頭を飛び出させていた。どれもこれもお便秘うんちにありがちなカチカチでひび割れた見た目ではなく、つるんとしている。ここ三日分溜め込んだうんちは全部出せたのかもしれないと思うほど、お腹の中がスッキリ爽快だった。

「いつもこんな調子ならいいのに」

ひまりはウォシュレットでお尻を洗い流してから、トイレットペーパーで丹念にお尻を拭く。柔らかバナナうんちだったせいで、ウォシュレットを使っても紙にはネットリした便カスが付着してきたので、それを二度、三度と繰り返してから、改めて便器の中を覗き込む。

「……ちゃんと流れるよね?」

思っていた以上にうんちが出たので、ちょっと不安になる。だが、この遊園地は古い遊園地ではない。立ち上がって身なりを整えてから水洗レバーを引いてみると、そんな不安が杞憂だったかのよう勢いよく水が流れて、こんもりとしたバナナたちが水の底に消えていく。

「ああ、よかった」

安堵の息を漏らして、順番を変わるべく個室を出ていくひまり。

トイレは多少並んだが、思っていたより順番待ちは長くなった。危なげなく我慢も出来たし、うちもちゃんと出た。これ以上ないくらいに、何の憂いもなくトイレを終わらせることが出来た。

これなら今日の夜は、純粹にハロウィンコスプレを楽しむことが出来そうだ。ひまりは心なしか足取りも軽くトイレの外で待っている千尋の元に戻ると、その足で衣装に着替えるために更衣室に向かつていった。



「夜の遊園地って幻想的だね！ キラキラしてて、綺麗で素敵〜！」
イベントが始まってそうそうに、キャラクターへのなりきりをすっかり忘れてはしやぎ始めるひまり。あれだけ小梅の口調を練習したというのに、遊園地の至る所を飾ったハロウィンの装飾、そして薄闇を幻想的に照らし出す照明に感動したように、片側だけを露出させた瞳を輝かせている。

「ひまり、そこのおばけのオブジェの前でお揃いのポーズとかいいんじゃないか？」

「あつ、このおばけ可愛い〜！ こんな感じかな……ばあ〜！」

千尋に促されて、内側にライトが仕込まれていてぼんやりと輝いているおばけのオブジェの隣に並び、手を幽霊ポーズにして舌をべろつと突き出すひまり。手が完全に隠れたアームカバーのおかげで、ポロポロの萌え袖がより幽霊っぽさを演出していて、なかなか様になっている。だが舌を突き出したその顔は、恨めしいおばけという

よりも、ただただ可愛いだけの生物であった。

「うん。かわいいかわいい。お茶目で人を驚かすときの小梅みたいだ」

千尋はスマホのカメラでそんなひまりの姿をどんどんと撮影していく。大量のジャックオーランタンが積み重ねられて山のようになったオブジェの前で。骸骨やゾンビの等身大人形の前で。

「楽しいね、千尋くん」

「ああ。かわいいひまりをたくさん撮れたし、ひまりも本当に楽しそうにしててこっちまで嬉しくなってくるよ」

気づけばイベントが始まってもう二時間近くが経過していた。この間、ひまりにトイレの問題は一度も起こっていない。楽しいことばかりで、まさに最高のイベントデーといったところであった。

「あつ。ひまりひまり。あそこ、あそこの前で写真撮ろう」

「どこ？ ……うっ」

周囲の薄闇がすっかり夜の帳に包まれた午後二十時ごろ。イベントの終了まであと一時間あまりとなったところで、千尋はとあるアトラクションを指さした。ひまりが視線を向けると、表情をこわばらせて声を詰まらせる。千尋が指さしたのは、ホーンデッドハウス。所謂お化け屋敷であった。

「結構リアル至高だし、小梅ちゃんっぽい写真撮れるんじゃないか？」

「そ、そうだね……」

千尋の提案に、あまり乗り気ではなさそうな細かい返事をするひまり。確かにそのお化け屋敷は、外観からしてかなりガチ目のホ

ラーを演出したアトラクションであるようだった。今までのハロウィンの展示物のポップでキュートでチャームिंगなおばけたちとはまるで違う。心霊、ゾンビ、血しぶき、客を本気で怖がらせようと作られた本格派お化け屋敷である。

「あー。中に入らなくても怖いかな？　ならやめておこうか？」

千尋もそんなひまりの反応に気付いたのだろう。気を遣って前言撤回するように、胸の高さに構えていたスマホのカメラをスッと下げる。

「べ、別に怖くないよ。小梅ちゃんなんでもん、お化け屋敷くらい怖くないんだから！」

しかしなぜか、ここでもきになったように声を張り上げて強がってみせるひまり。ホラー好きな小梅になりきっているせいなのか、それとも千尋に怖がつているのを揶揄われたとも思ったのだろうか。普段仲良くゲームをしているときは、ホラーゲームやアニメのホラー展開でひまりが驚くたびに、千尋はちよつと意地悪っぽい雰囲気でも揶揄ってることがある。普段であればちよつと怒ったフリをしてそのやり取りを楽しむ余裕もあるはずだが、小梅にコスプレしているからこそ、怖がつていることを揶揄われたのがちよつぱり癪に障ってしまったのかもしれない。

「ほ、ほら。こんな感じのゾンビポーズとかどうかな？　う、ウボアアアア~~~~、みたいな！」

ひまりは腕を前方に突き出し、大きく口を開けたゾンビっぽいポーズを取ってみせる。しかしその表情はやはり引き攣っていて、少しぎこちない。

（ひまりには申し訳ないけど、お化け屋敷の前でビビってる小梅ちゃんって、新鮮でこれはこれでかわいくてアリだな……）

などと、ひまりに聞かせたら機嫌を損ねそうなことを思いながらも、スマホカメラのシャッターを切ってその姿を写真に収める千尋すると、撮影が終わったタイミングで一人のレイヤーが声を掛けてきた。

「あつ、小梅ちゃんだ。かわいいー！」

「あつ、ありがとう、ございます……そちらは輝子ちゃん、ですよね。かわいい、です……えへへ」

ひまりは咄嗟に引き攣っていた表情を手でほぐすようにして、小梅っぽくもった口調を作ってお礼を返す。声を掛けてきたレイヤーは、小梅と同じデレマスに登場するアイドル、星輝子のコスプレをしていた。小梅と同じユニットがあり、デュオでの持ち歌もある相性抜群なキャラクターだ。デスメタルなメイクと衣装で、こちらもハロウィンの雰囲気によく合っていた。

互いに互いのコス completion度を褒め合い、推しアイドル談義を交わしてから、定番の写真を撮っていいののやりとりして、千尋に写真撮ってもらう。こうしたレイヤー同士の交流もまた、非常に楽しい経験であり、いい思い出になるだろう。

「小梅ちゃん、もしかして、今からお化け屋敷に入るところだったんですか？」

写真撮影も終わったところで、相手の輝子レイヤーがそう訊ねてきた。そこでまたしても、うつと言葉に詰まりかけるひまり。千尋はさりげなくフォローすべきかと一瞬悩んだが、その悩んでいる間

にひまりが少し引き攣りかけた表情を誤魔化しながら、返事をして
いた。

「……う、うん。今から、入ってみようかなーって、プロデュー
サーさんと話してました……」

「……ひまり？」

小梅の口調を維持したまま肯定するひまりに、千尋はその真意を
確かめるように横顔をじっと見つめる。ひまりは千尋に目を合わす
ことなく、目尻や唇の端を微かにヒクヒクと震わせていた。

「さすが小梅ちゃん！ なりきってるだけあってホラーも大好きな
んですね。私もちょっと興味あったんですけど、結構コワイって聞
いて躊躇っちゃって。中で撮影は出来ないみたいですけど、楽しん
でてくださいね！」

「う、うん……楽しんでくる、ね……？」

結局ひまりは小梅のなりきりを貫いてしまった。輝子レイヤーに
背中を押されるように見送られて、千尋の手を取ってお化け屋敷の
入り口へと向かっていく。

「ひまり、無理しなくても……あのレイヤーさんが向こうに行くま
で粘って、離れよう？」

千尋はひまりの耳元でこそそこそと囁く。だがそのレイヤーは、小
梅ひまりの勇姿を最後まで見届けると、ぐっと拳を握りエールを送
りながらまだその場で手を小さく振っていた。悪気はないのは重々
承知だが、何とも質の悪いことだろうか。

「なあひまり。結構怖いって言ってたじゃん、あの人だって入るの
辞めたみたいなんだし、入らなくても誰も文句言わないからさ」

「だっ、大丈夫だよ！ 大丈夫だから、怖くないから！ ひまり、
小梅ちゃんだから怖くないもん……！」

千尋は何とかひまりと押し留めようとしたが、一体何がそうさせ
るのか。更にその背中を押そうとしているのはレイヤーだけでなく、
お化け屋敷のスタッフもであった。気合の入った格好のひまりが入
り口に近づいてきたことで、完全にウェルカムの姿勢で待ち構えて
いる。強がってしまったひまりは、もう後に引けなくなっていた。

こうなってしまうのは、もう千尋にも止めることは出来ない。な
し崩し的に二人はフリーパスを提示してお化け屋敷に足を踏み入れ
る。そして数分も経たないうちに、

「きゃああああああああっ!!」

お化け屋敷の中に、ひまりの絶叫が響き渡ったのであった。



イベント終了後。

「い、いろいろあったけど楽しかったな？」

「う、うん。ありがとう、千尋くん。ホント、楽しかったよ。うん、
楽しかった……」

どこか気まずい様子の二人の会話。

コスプレ衣装もうまく出来た。キャラのなりきりも良い感じで
あった。素敵な写真もいっぱい撮れたし、他のレイヤーさんとの交
流も出来たし、何より一切のうんちトラブルが起らなかった。控
えめに言って、楽しくないはずがない良い思い出終わるはずだっ

た。最後に強がってお化け屋敷に入っていなければ、すべてが良い思い出で済んだのだ。

無理して入ったお化け屋敷で、ひまりは早々に絶叫して腰を抜かしてしまい、動けなくなってしまった。結果、千尋におんぶされてリタイア用の出口から出るという失態を晒してしまった。幸いにもそんな姿を見ず知らずの誰かに見られたというわけではなかったが、強がってしまった手前、千尋には言い訳さえも出来ないままイベントの終了時間を迎え、慌ただしく着替えを済ませて、遊園地を後にしたというわけだった。

その後も打ち上げの夕食もそこで切り上げ、徒歩三十分の距離をぎこちないままに歩いてビジネスホテルに到着し、チェックインを済ませる。せっかくのお泊りなんだし、本当なら眠くなるまで今日一日のイベントを振り返ってお喋りしたかったところだが、そういう雰囲気でもなくなってしまった。

「それじゃあ、おやすみ……千尋くん」

「あ、ああ。おやすみ、ひまり」

結局二つ横並びで取った部屋の扉の前で別れると、それぞれの部屋に引っ込んでいく。

部屋に入るなり、ひまりは着ていたコートを脱いでハンガーに雑に引っ掛けると、勢いよくベッドの上に飛び込んだ。

「うう……なんであんな強がりしちゃったんだろう」

ひまりは枕に顔を埋めて足をじたばたさせながら自問する。

「小梅ちゃんのコスプレしてるから、小梅ちゃんならこうするって考えすぎたのかな……」

ひまりは少々、自分がコスプレしているキャラを神聖視している傾向がある。例えばコスプレした状態で外でおならをしようだけでもファン失格だと思ひ込んでしまったり。そのキャラがやらないうような行動を取るのが罪だと言わんばかりの思い込みを持ってしまいがちだ。ひまりが怖がりだと知っている千尋相手ならともかく、同じ作品のレイヤーに出会ったことで、ホラー好きの小梅がホラーを怖がるような素振りを見せてはいけなと思ってしまった。その結果、あんなにも頑固な自分を出してしまったのかもしれない。

「うう……怖かったなあ……」

お化け屋敷の中にいたのは、トータル十分にも満たない。にも関わらず、あの恐怖の光景が脳裏に焼き付いてしまっていて、目を閉じれば思い出されてしまう。

「……ひうつ」

部屋の中で別に何かがあったわけでもないのに、思い出しただけでビクッと身体を震わせ、部屋中に視線を彷徨わせる。安いビジネスホテルの一室は、シンプルな重たいカーテンが敷かれて、照明も必要最低限の明るさで、ベッドとテーブルの他は、風呂とトイレが一体化したユニットバスに通じる扉があるだけ。その扉は下に隙間が空いているタイプで、そこから何かが覗いているような恐怖心を覚えてしまう。

部屋の中に生じた闇から視線を逸らすように時計を見ると、時刻は間もなく十一時になるところだった。

「きよ、今日はもう寝ちゃおう……お風呂は明日うちに帰ってからでいいよね……」

恐怖が付き纏った状態で風呂に入るくらいなら、一日くらい延期したほうが良いと決めたひまり。夏ならともかく、季節は冬になろうとしている時期だ。汗なんてこれっぽちもかいていないし、むしろ外は防寒対策を施してもコスプレ衣装では肌寒かったくらいだ。一日くらい風呂に入らなくても、汗臭くはないはずだろう。

ひまりは荷物の中からパジャマと替えの下着を取り出すと、そそくさと着替えはじめる。小梅をイメージした上下黒のセットのショーツとブラを脱いで、夜お腹を冷やさないように少しモコモコした子供っぽいパンツに履き替え、上は地肌にスリッパを。その上から秋らしいアースカラーのチェック柄の厚手のパジャマを着る。

ベッドに向かおうとしたところで、一度びたりと足を止めてユニットバスの扉に視線を向ける。寝る前におしっこに行っておこうかと一瞬思ったのだが、やはりその先に得体の知れない何かが待ち受けているような気がして、足がすくんでしまう。

「べ、別にそんなにおしっこしたいわけじゃないし、やめとこうかな……」

ひまりは悩んだ挙句に尿意が大して強くないことを理由にしておしっこに行くのを諦めると、部屋の電気を消してベッドに向かった。「お、おやすみなさい……っ」

おでかけひまりと小さなトイレ

A J

朝の支度をする伊澄ひまりはとても楽しげな様子であった。鼻歌でも聞こえてきそうなほどにご機嫌な面持ちで、そして玄関に千尋の姿を認めると一層笑顔が眩しくなる。

「おはようひまり」

「あつ、おはよう千尋くん！」

そこには千尋の姿がある。物心付く前からの幼馴染であつて、今は彼氏でもある千尋がひまりの自宅まで迎えに来てくれている。お迎え自体は大学生となった今でも平日のルーティンに組み込まれているありふれたことだが今日は休日。ひまりが、そして恐らく千尋も楽しみにしていたお出掛け……もつと適切に言えばデートのためのお迎えであつた。

「準備できたか？」

「大丈夫だよー準備万端。ふふ、ドライブデートなんて始めてだし、すつごく楽しみにしてたんだからね」

その言葉どおり、今日もひまりはかわいらしい。見せつけるようにその場で回り、お気に入りのワンピースを揺らす。背丈は低めで肉付も控え目な小動物めいた雰囲気のみまり。相貌もまた幼げではあるが、平素よりも丁寧かつ気合いの入った化粧は女子大学生という大人の魅力をも同居させている。

今日は千尋が親から借りた車で高速道路を走り、少しの遠出と話題のお店でのランチを楽しむ予定であつた。恋仲の男女らしいイベ

ントに、ひまりの頬は緩みっぱなしである……身長差ゆえの上目遣いと柔らかな微笑みに千尋の顔にもやける。

「……そんな楽しそうにしてちゃんと眠れたか？」

「ん、ほどほどにぐつすりできたよ」

いつでも出発できる状態であつたが、もう一つ朝のひまりには大切な用事がある。

「まだ時間あるしゆつくりでいいからね」

「うん、トイレ行ってくるね。まだうんちしてないから」

ひまりは毎朝出掛ける前は必ずトイレにこもる。便秘気味の体質であつて、毎朝大便を出せるわけではないが、それでも朝は必ず息み踏ん張る。信頼している千尋が相手だから、恥ずかしげなく笑顔のまま大便をすると伝えることができる。伝えてしまう——千尋の動揺と揺らぎに、まだひまりは気付かない。

自宅のトイレは最も安心して排泄行為に及べる場所だ。ひまりは商業施設や大学のトイレでも、洋式であればためらいなく排便をすることができると、思い切り声を出して息んでうんちができるのは自宅か、一人暮らしをしている千尋宅のトイレぐらいである。

（今日はお便秘して四日目だし……昨日も一昨日もいっぱい食べたし……そろそろ出てくれるよね？ お出掛けだし、ちゃんと出しておきたい）

ひまりの右手がワンピースとセーターに包まれた下腹で円を描く。ぐるぐるとお腹を擦ってみるが、そこに詰め込まれた消化器官の反応は芳しくないようだ。

(とりあえず座ってうーんってしてみよ。ちょっとは出るかもしれないし)

便意の気配はない。朝ごはんも食べたが、訪れた蠕動は力不足であって、四日間老廃物を溜め込んだお腹が重い。

愛用のペチパンツと薄桃色のショーツを降ろし、ワンピースを捲り上げて洋式便器に腰掛ける。その小柄な体軀ゆえ「ちょこん」と座るといふ表現がよく似合う。

「んっ……んんっ……う、んっ……!」

ひまりが最後に排便できたのは三日前の朝であって、此度の便秘は四日目に突入している——そろそろ、なんとしても出したいと願う始める頃だろう。ワンピースを捲り上げ、覗く下腹が僅かに膨れているのは決して気のせいなどではない。

「うんっ! うーんっ、うーんっ!」

一生懸命な声が響く。息を詰め腹圧を込め、与えられた力が腸管の内容物を押し出そうとするが、結腸に詰まり硬化した便塊はそう簡単に動いてはくれない。

「んんんっ! うーんんっ! んううう……っ!」

(あんまり期待してなかったけどやっぱりうんち出ない……! でも、もうちょっと頑張ったら降りてくるかもしれないしっ)

可憐な相貌が強張り力が入る。踏ん張りによる血圧の上昇で頬が紅潮していく。それだけひまりがうんちを頑張っている。

「んんん……っ!」

ぶううっ! ぶびびび……っ! ぶううううーっ!

(おならくさい……っ もう、お便秘ってこれだから嫌なんだよね。

昨日結構食べちゃったし、出ると思うのになあ……)

「はああ……!」

息継ぎと溜息を兼ねた吐息の後、もどかしげな表情を浮かべる。踏ん張りゆえの汗が額に滲む。明らかに糞便が溜まっているのだが、重く硬いそれに動いてもらうのは難しい。

(まだ時間あるしもうちょっと……もしもまた急にうんちしたくなったら、大変だもん)

先日のコスプレイベントに重い便秘のまま参加し——とても人言えないような事態となってしまったひまりだから、お便秘うんちを出そうとするその瞳は真剣そのもの。深く息を吸って次の踏ん張りに備える。

「うーん……んんっ! うーんんっ! うんっ! んんっ!」

はしたなく大股を開いて、ペチパンツとショーツを片脚脱いで、もうひまりはうんちに全力だった。

ぎぢ……ぎぢぢ……っ!

(来た……うんち、出るかも……っ! もうちょっと踏ん張ってうんち出す……! 四日分のうんち、ちゃんと出すもんっ)

切なる祈りと必死の頑張りが通じたのか、僅かにお腹がぐるぐると動き始め、波打つ肉壁に乗り、がちがちに硬くなった便が降りて来る感覚が確かにあった。

「うーん……んんっ!! ううううんんっ!! うんち、出てえ……!」

今にもどこかに消えてしまいうような細かい便意を掴むべく、ひまりは全力で息を詰める。うんちを出したいからお腹に力を込める。重たいお腹をすっきりさせたくてうんちと向き合う。幼児めいた声

を撒き散らして気張る。

みぢ みぢぢっ

「うんんっ！ うーんんっ！！」

みぢぢぢ……っ ぼちゃんっ……………

（うんち、なんとかつ、出たけど……でも、ちっちゃい……お便秘してるときのコロコロうんち……もっといっぱい溜まってるのに）

そしてひまりの全力とは対照的に、その排泄孔を擦り飛び出したのはごく小さな石ころのような便秘うんち。もちろん三日前の朝から今に至るまでひまりが食事を消化をした成れの果ては、こんな重さでは済まない。出すべきものはまだひまりのその薄い体の奥にぎっしりと詰め込まれているはず。

「うーんっ、うーんっ、ん、んっ、んんっ！」

ぶうう……ぶびぶびぶび……っ！

それなのに僅かながらあった便意は霧散してしまい、影も形も残っていない。「まだうんちがしたい」とひまりの心が叫んでも、お寝坊お腹は二度寝に戻ってしまっている。代わりに便秘ゆえ溜まっていたガスが噴き付けられ、その刺激臭を周囲に拡げていくだけだ。（そんな……四日分だからもっとたつぷりうんち出るはずなのに、うんちしたいの引っ込んだんじやつた）

「んっ、んうう……っ！ ……はあ……っ……」

性懲りなくまた息んでみるも、出したいお腹の中身が降りて来てくれることはなく、溜息じみた吐息を最後に、ひまりの指は温水洗淨のスイッチに伸びていった。

（あんまり長くこもると心配されるし、出発遅れちゃうし……変な

タイミングでしなくてはならないといいけど）

ほんの少しとはいえずんちが出たから、十秒ほどは温水を尻穴に当てて清め、紙で水気を拭き取り事を終える。結局、お便秘お腹をすっきりできないまま、ひまりは再び千尋の前に姿を現わした。

「おまたせ……時間掛かってごめんね。行こっか」

いつもどおりの笑顔を浮かべて話す。けれど肝心の時間を掛けた成果については明かさなかった——すっきりうんちが出せたら嬉しそうに千尋へ知らせるひまりだから、言及がないということは、便秘うんちを腸の管に溜め込んだままということ。

「……ああ」

出せなかったということ。それは千尋にもひまりの雰囲気から理解をしてみえる。

* * *

休日ということもありやや混雑気味な高速道路を、一台のハッチバックが走る。大学入学前の春休みに自動車免許を取得した千尋は、まだ初心者マークを付けているが、急ブレーキも急ハンドルもなく安定した運転を見せ、三半規管の弱いひまりも助手席で快適そうにドライブを楽しんでいる。

「千尋くん運転うまいねーわたしもそろそろ免許取ろうかなあ」

「まあ、練習は付き合ってやるよ」

素っ気ない態度ながら褒められ内心得意げな千尋がいる。実のところ免許取得後、ひまりを隣に乗せるため頻繁に練習をしていたの

だが、それは敢えて言わないのが見栄というもの。

「それよりも今から食べて本当に大丈夫か？」

「まだ時間掛かるし、朝少なめだったし、それにスイーツは別腹だから大丈夫だもん」

そう言うてひまりは満面の笑みでお芋のタルトを口に運ぶ。先程休憩のため立ち寄ったサービスエリアで売られていたもので、昼食前の間食にはややボリューム感があるが、さつまいもが大好物なひまりがその誘惑から逃れられるはずがない。小さな一口一口で食し、大好きな香りと上品な甘みに頬を綻ばせる。そんなかわいらしい様に、ハンドルを握る千尋は危うく前方不注意になるところであった。そうやってひまりは小腹を満たし、車は目的地に向け順風満帆に進んでいく。そんな車内でのこと。

きゅる……ぐる……ごぼっ

ちよっとした間食を終えて間もないその時、ひまりのお腹がちよっとした主張を開始する。そう、もしも自室であれば本当に、
“ちよっとした”で済ませてしまえる類いの主張である。

(っ、どうしよ……おならしたくなつてきちゃった……)

おやつとはいえ胃袋に食物を投じたせいなのだろう。消化器官の蠕動が起こり、その末端に詰め込まれていた大量の気体が押し出されるのは自然なこと。ましてやひまりは便秘の四日目。放屁欲求を強く催してしまったとて不思議はない。

(うううお腹張って辛くなってきたかも……出したいけど、車の中なんかでしちゃったら絶対千尋くんにもバレるし、恥ずかしいっ)

まだ十九歳の若き乙女であるところのひまりだ。恋人の目と鼻の

先で堂々と屁を放つような恥知らずではなく、先刻から急速に直腸を膨らませ出口に迫る腸内ガスはこのまま留めておくしかない。ほんの少しばかり安全運転を疎かにすれば手を繋ぐことすら叶う距離では、放屁など間違いない露呈するのだから。

ぐるる……ぐぶぶ……っ

(お便秘してるし、おなら絶対くさいもんっ、だめだめだめっ)

腸管が蠢き一層大量の熱が駆け下りる。四日も溜め込んでしまった糞便に起因する腐敗のガスは今この瞬間も生成され続けている。それゆえ、気を抜けば溢れ下品な音を響かせてしまいうようなほどに内圧は高まっていた。

それでもひまりは我慢をする。座席の上で状態をよじり、小ぶりな尻をもじつかせ、体を強張らせる。柔らかな笑顔が、段々と険しいものへと変わっていく。

「っ……ふう……」

呼吸の一つも慎重に。不意の腹圧で派手に放屁をすれば赤っ恥もいところだから。経験則からしばらく我慢をすれば、ガスが逆流しだして放屁欲は落ち着くはずと信じて耐える。

ごぼばば……ぎゅるるるっ

(よかった……おならしたいの落ち着いてきたかも……でも多分またしたくなる。トイレでガス抜きしたいし、頃合いを見て休憩したいな)

お腹が主張を諦めるまで耐え、鋭く重い欲求が過ぎ去っても、出したいものは腹腔の内に秘められたまま。トイレで便器に尻を向け、思う存分腸の圧力を開放したいのは変わらない。

「あ、こっちのカプチーノも飲む？」

「ああ、貰うよ」

変わらずドライブデートは楽しみつつ、されど出したいものはずっとそこにある。

＊ ＊ ＊

ぐるるるる……ごぼごぼ……っ

（っ、またおならしたくなってきた……やっぱトイレ休憩お願いしようかな。そろそろちゃんとガス抜きしたいもん）

何度目かの放屁欲求に苛まれながら、ひまりは秘かに下腹を撫でた。便とガスで張り詰めた腸の管が重たくて、今この瞬間を純粹に楽しみたい心を邪魔している。お腹の減圧は、今ひまりにとって喫緊の課題であった。

「ねえ、またトイレ寄ってもらってもいい？」

尿意を訴えるほどおしっこは溜まっていない。うんちがしたいわけでもない。ただ、思う存分放屁をするため便器が欲しい。

「いいけど、この先ちょっと渋滞しているみたいだし、時間掛かるかもしれないぞ。大丈夫か？」

「う、うん、大丈夫……」

下腹を撫で擦る。まるで『大丈夫だよ』と自身の消化器官に念を押すように。

「……大きい方か？」

「あ、えーっと、そうじゃないんだけど、そうとうか……ごめん

ね、何日か出て無くて、お腹結構張っちゃってるから、その……」

うんちがしたいと言ってしまえるのに、なぜだかおならのためにトイレに行きたいと言うのは気恥ずかしく思えてしまう。そんな心理を映す曖昧な言葉であった。

「あ……そつちらあんまり気にするなよ。窓、開けるか？」

期待。動揺。好奇——千尋のそんな感情はいつもどおりの口調に覆い隠されひまりには伝わることはない。

「……っ！　わ、私が気にするのっ！」

氣遣われ、つまり暗に放屁を勧められ、羞恥の感情を乗せ抗議をするひまりだが欲求は止まない。勝手に溢れ出しそうになる。おならがしたい。それでも我慢をする。

「や、やっぱり渋滞して、あっ」

そんな我慢の最中のこと——車列の停滞は分かっていた。けれど前の車が不用心にも急ブレーキを掛ければ、当然千尋も強めの制動を掛けざるを得ない。ひまりの軽い体がわずかに前へつんのめる。それがいけなかった。

ぶびっ……！

（やつ、お、おならでちゃった……っ!?）

直腸を張り詰めさせたガスは、その主が僅かに気を抜けば簡単に出口を通り抜け溢れ出すことができる。そんな不意の暴発は幸いエンジン音にかき消されるが、一度開かれた穴は塞がらない。

ふしゅうううううっ!!

そして高熱がひまりの下着とワンピースの布地に、助手席のシートへ猛烈に吹き付けられた。その熱は瞬く間に生暖かさに変わり、

決して広いとは言えぬ車内へ拡散していく。

「あ、え、えっと、換気とかしよかな……っ」

彼氏の目と鼻の先で放屁をしでかした事実には顔を真っ赤にしたひまりは、冷たい風が流れ込むことも厭わず窓を開けた。とはいえ、外気とひまりのガスを含む車内の空気が入れ替わるのには多少の時間を要するもの。

「うう、くさい……っ、だめ、これじゃ千尋くんのとこまで……っ」
すかさずことはできた。けれど鼻を突く悪臭までは消えてくれない。便秘糞に由来する糞便そのものといえる強い腐敗臭は、きつと千尋のところまでも届いている……気遣いゆえの無言が余計にひまりの羞恥を煽った。

「……その、ごめんね……」

しおらしく謝罪するひまりに、千尋も軽く相槌を打つ。いたたまれぬ雰囲気は漂う中だったが、ひまりのお腹はまだ満足をしない。

ぐるぐるぐるるるっ……ごろごろっ……っ！

そして続く腹鳴りは重かった。それは単なる放屁の前触れに留まらず、奥底にあるものを突き動かすだけの力が籠もり、同時に訪れる欲求が彼女を行為に駆り立てる。

「うそ、どうしよう、うんちもしくなってきた……っ！」

朝出かける前、切に望みしかしついで訪れなかった排泄の欲求が鎌首をもたげている。波打つ肉壁が四日分の老廃物をせわしく運び、力強い便意がひまりに浴びせられる。

「っ……………っ」

（結構……したいかも。一昨日からちよっとたくさん食べちゃって

るし、食物繊維たつぷりのお芋とかもあったし……うんち、一気に降りて来てる感じする……）

四日分抑圧され続けた分だけ排泄の欲求は強い。華奢な体格の割にはよく食べるひまりだから、迫る便塊は重い。まだ催したばかりだが、欲求の波の高さについて眉を傾けてしまう。ついお腹を擦ってしまふ。むずむずが押し寄せて、そわそわが止まらない。

「……千尋くん、そ、そうじゃなくてね」

そんなひまりの仕草に、またおならがしたくなったと解し、無言で窓を開けてやる気遣い上手な千尋だったがそれは誤解である。

「うんちしなくなってきた……っ。トイレまだ……？」

僅かに険しさを孕んだ面持ちで、ひまりは便意に苛まれている事実を素直に告げた。

「さっき見た電光掲示板の情報だと、事故渋滞で抜けるまでは三十分以上掛かるらしいな……大丈夫か？」

「うん……お腹壊してるわけじゃないから、大丈夫だと思うけど」
ぐるるるぐううう……ぐるるるるるっ

（大丈夫……大丈夫、だよな？ すっごくうんちしなくなったけど大丈夫。あの時みたいな恥ずかしいことにはならないもん）

遅々として動かない車内の中、蠕動と共に訪れる便意の波に耐える。まだ限界までは遠くとも、四日分の食物を消化した便塊は重く、鈍い痛みと圧迫感に絶えず責め立てられ、ひまりは幾度となく身よじってしまふ。

（うんちしたいうんちしたいうんちしたいっ！ はやくトイレ行きたいのにつ、渋滞早く抜けてよお……！）

（トイレ、トイレ、おトイレっ！ おならしたけどうんちしたいの全然治まらないっ、でっかいうんちがお尻のどこまで来ちゃってる……はやくうんちしたいっ！）

いたたまれない空気の中、容赦無くお腹が動いて便意が増していく。それなのに、渋滞に巻き込まれた車の動きは牛歩に等しく、念願の白い陶器はまだ遠い。

「まだなの……はやくうんちしたい……トイレ……っ」

「もう少しだからな、頑張れよ……！」

膨大な欲求を言葉として漏らすひまり。自身の彼女が情けなく排便欲に悶える様子から、千尋は運転中だというのに目を離せないでいる。

「う、うん……だいじょうぶ、がまんできる……っ」

そしてひまりの応答はもう涙声であった。千尋が何度も視線を向けることも気に掛けず、お気に入りのワンピースへ皺ができるほどにお腹を絶えず擦っている……それぐらいひまりはうんちがしたかった。うんちがしたくて仕方がなかった。

「ふうう……ふうう……っ」

ぐるるるるるるるるるるるっ……ぐうううう……っ！

ずっしり重たい硬質便が腸壁を擦り続け、排泄孔へ突き刺さり、その刺激が絶大な便意に変わってひまりを苦しめる。それなのに腹が鳴り、蠕動が無理矢理に老廃物を下へ下へと送り続ける。

ぶびっ……ぶびびびっ……ぶうううっ

だから放屁を我慢するのも今や難しい。俯くひまりの尻がまた震え、恥ずかしい音と臭いをぶち撒ける。

慣れない下痢と、先客と。

できずとりん

1 ひまりと朝うんち（空振り）

大学一年生として迎える、初めての冬。

秋学期も後半に入った十二月の後半は、天気予報が言っていた通りで、例年よりも厳しい冷え込みになっていた。コートを纏わないと生活できないくらいの寒さの中を歩いて、家を目指す。

家、といっても自分の家ではない。ましてや実家でもない。

なのにインターホンを押す必要もなく、合鍵を使って入ることのできるこの家は。

「おはようございます」

付き合つて九ヶ月——いや、もしかしたらまだ八ヶ月かも——になる彼女、伊澄ひまりの実家。とはいえ、彼女というよりも幼馴染という感覚の方が強いから、家の玄関を開けるときに緊張もしないし、挨拶をしたところで両親がもう仕事に出ていて、この時間帯の伊澄家がひまりしか残っていないことも知っている。

時刻は七時五十分、今日もいつもと同じ時間。てつきりまだ部屋で着替えているところかと思ったら、リュックが玄関に置きっぱなしになっているのが見えた。なのにひまり本人の姿が見えない。

こういうとき、ひまりの居場所は一通りしかない。一通りしかないけど、その場所にいることを確かめるのは……正しくは「ひまりに怒られないように」確かめるのは、少しだけ難儀する。

「ひまりー、おはよう。今トイレにいる？」

玄関に立ったまま、靴を脱いで上がることはせずに大きめの声を上げる。声が届くように意識する先は、今の立ち位置からだいたい一〇メートル弱くらい離れた扉。水回りが固まっている部屋の手前、二つ並んだ扉——奥側が男性用の小便器で、手前にあるのが洋式便器のある普通のトイレ——のうち、手前側の扉の向こうにひまりが座っているのを、俺は確信している。

確信しているけど、扉の前に近づいたり、ましてやノックなどしようなものなら怒られるのは確実だから、家には上がらない。だからこうして玄関から声を掛ける。

「……あ、千尋くん！ おはよう、わたし今トイレだよ」

「分かった。ゆっくりでいいから」

「うん……あ、千尋くんこつち来ちゃダメだからね」

「行かないよ。……今日は時間掛かりそう？」

「うーん、ちょっと……って、わたしが言っていないのに千尋くんから聞くのデリカシーないよ？」

あ、やべ。俺の方から聞くとき少し怒るんだった。

ひまりから話すことの方が多いうから、つい油断してしまう。

「まあいいけど。お腹、ちょっとだけむずむずしてるから、一応頑張るね。もし遅刻しそうになったら教えて」

「おう」

一限に間に合うためのバスに乗るには、家をと三〇分後に出ないといけない——けれども、ひまりが普段、朝のトイレに籠もる時間は長くて一〇分。遅刻する心配はないだろう。

その会話を最後に、伊澄家の玄関は再び静かになる。ひまりも気を遣っているのか、或いは単に声が小さいだけなのか、トイレを済ませているときの息み声の類いが聞こえてくることもない。まるで誰もいないかのような、静かな空間。

「……SNSでも見てるか」

俺とひまりの日常であり、けれども最近ほ少しだけ緊張するようになったその時間を、努めて冷静に過ごしていく。



珍しく早めに準備が終わったから、千尋くんが来る前にトイレに行っておこう、って思ってたトイレに入った瞬間に千尋くんが来た。会話をしながらトイレの蓋を持ち上げて、ワンピースの中に手を入れてタイツとショーツを順番に膝まで下げる。最近冷え込みが強く なってきたから、タイツも六〇デニールから八〇デニールの分厚いの に替えたお陰で結構暖かい……けど、タイツを下ろすと反動で とつても寒いつ！ 秋口はペチパンツがわたしの相棒だったけど、 足下が寒くなってきたら春先までお別れ。

温かい便座に腰を下ろして一息。まずはおしっこから。あんまりしたくないけど、トイレに座ると本能的に尿意を感じちゃう。

しゅうううううう、じゅいつ、じゅううじょろじょろ……。

千尋くんの足音は聞こえない。きつと玄関でスマホでも弄ってるんだらうね。別に今更だし、おしっこ音くらいなら千尋くんに聞かれてもさほど恥ずかしくないけど。

けど……うんちは、聞かれたくない。

「うん、っ。……………うんっ」

ゆっくり、優しく思んてうんち——と行きたいところだけど、今日の便意はちよつと弱くて、もたもたしていたらうんちしたいのが引っ込んじやいそうだったから、しつかり目にお腹をさすらないと。うんちが出てくれる日と出ない日の、ちょうど中間くらいの便意。

お腹が小さくごろごろ、ころころと音を立てる。大腸が動いていないわけじゃなくて、けれども「うんちがしたいかも」とは中々感じられない強さ。

——うんち、今朝は出ないかも。

そう思ったけど、希望を捨てきれなかった。ほんの小さなお腹のごろごろが消えていくのを、黙って過ごすのは嫌。身体が強くなつて、お便秘気味な日々にも慣れてきたつもりだけど、まるまる三日間溜め込んじやって四日目に差し掛かると、お腹が重いもんね。

もう一回だけ、チャレンジ。

「んんん~~~~……………ううんっ……」

優しい、という言葉でも強すぎる表現な気がする。弱々しい便意だったけど、それでも朝のうんちが出そうなタイミングに変わりはなから、お腹に力を入れる。

ぶすっ、ぶうううっ！ ぶびいーっ、ぶっ

けれども、出てくれたのは少量のおならだけ。お腹のむずむずの弱さに見合ったガスが出て、便意は完全に引っ込んじやった。ガス抜きって言えるほどおならも出たわけじゃないし、もちろんうんちも出ないから、お腹のむずむずは残ったまま。

もやもやは残ったままでけど、いつまでも籠もってるわけには行かないからトイレを出る。一応トイレットペーパーでお尻をなぞったけど、汚れが付くこともないし、トイレの中もおしっここの薄い黄色があるだけで、うんちの痕跡はゼロ。残ったのは結局、トイレに入る前とそんなに変わらないお腹のむずむずだけ。

「はあー」

水を流して手を洗って、トイレを出る。スリッパを履き替えて玄関を見ると、千尋くんが気怠げにスマホを見ていた。

「ごめんね千尋くん、お待たせ。改めておはよう」

「おはよう。思ったより早かったけど」

「うん。……うんち、出なかったから」

「……大丈夫なのか？」

「まだお腹むずむずしてるけど、すぐ消えちゃうと思うし、平気。今から出ればいつものバス間に合うかな？」

「そうだな……ちよつと走らないといけないかもしれないけど」

「じゃあ、すぐにしようよ」

いつも通り千尋くんの手を引いてもらいながらバス停に向かう。

千尋くんが躊躇いなく手を握ってくれる数分間が一番好き。バス停がもう少しだけ、家から離れていけばいいのに。

バス停が見えてくる頃には、ちょうどバスが到着するところだった。千尋くんがわたしを引っ張る力が強くなって、小走りでバスに駆け寄る。ICカードをタッチして息を切らしながら乗り込むと、息を切らしている間にすぐに窓の景色が流れ始める。

中々、お腹のむずむずは消えていかないけど……大丈夫なはず。

2 ひまりと朝うんち（ぶり返し）

……はず、だったのに。

お腹がゴロゴロする。腸がぐるぐる動いている感じがして、お尻の穴が急にむずむずし始めて、頭の中が——洋式トイレに座ることではないことになる。つい数分くらい前まで座っていた家のトイレに今すぐ戻って、もう一度うんち、って踏ん張りたい。

うんちが……したい。

きゅううう、ぎゅるぎゅる。ごろごろ。ぐるる……。

「……………ふう、っ」

バスの窓から見える目の前の景色が左から右へ動いていく。住宅地が終わりに近づいて徐々に市街地に入っていく風景が、わたしが一番落着いてうんちを済ませられるトイレが……家のトイレが遠くに離れていくのが、否応なしに感じられちゃう。

「ひまり、顔色悪くないか？ 大丈夫？」

「うん、平気平気。なんでもないよ」

なんでもないわけがないっ！ すっごくうんちしたいっ！

……なんて言えるはずもないよね。さっき千尋くん「うんち出なかったけど、平気」なんて言っちゃったから、トイレに行きたいなんて言い出しにくいし……。

大学最寄りのバス停までは二〇分くらい。バス停から大学まで歩いて、トイレがある一番近い講義棟に入ってトイレにたどり着くまでの時間だと……二十五分。我慢……できるかギリギリのライン。

お腹さすりたいたいけどさすれない。バスの中でいろんな人が見てるかもしれないからね。手すりを掴みながら、頑張ってお尻の穴の力だけでうんちを我慢しないと。

ごぼごぼごぼ。ぎゅるるるる……ぐううつ。

はあ……うんちしたいうんちしたい。下痢じゃなくて便秘気味だったから我慢するのも難しくないと思ってたのに、全然楽じゃないし、さつきからお尻の穴がすごく苦しい。家のトイレだと微塵も感じられなかった大きなうんちの塊が、今になって出口のすぐそこに押し寄せてきて、お尻の穴を開こうとする。

ここから、あと二五分……バスに五分くらいは乗ったから、あと二〇分くらいになったかな。けど、こんなにうんちがしたくなつてると、二〇分はきついかも……どうしよう。

「今日は渋滞してるみたいだな」

「え……？」

千尋くんが放った一言が、わたしをまた一步絶望へと追いやった。スマホの時計を見ると、バスに乗ってからは確かに五分くらい経っていた。でも、たった今通過したバス停はまだ、家の最寄りのバス停から二つしか離れていないバス停。普段なら三分は掛からずにここまで来ているはずなのに。

窓の外をよく見れば交通量がやけに多かった。理由は分からないけど、普通の車が多く走っている。道が混雑すればその分だけ、バスが大学に到着するのが遅くなる。バスが遅れば……わたしが、うんちできるのも遅れちゃう。

そんなの……そんなの……。

市街地に入るところの交差点でバスが止まって、窓の外の景色が動かなくなる。大通りが交差する信号だからバスも大概止まるけど、普段より随分手前で止まっているような。

ごろごろごろろろろぎゅるるるる……っ！

うう……また、うんちの波が来た……我慢しなきゃ……。

千尋くんは隣で呑気にスマホ弄ってるし。わたしがその隣でうんち我慢して苦しい思いしてるなんて知らずに。いや知らなくて良いんだけど。でも苦しいのは苦しいっ！

スマホを見る余裕もなく、じっとうんち我慢。トイレを探す必要がなくて、ただ立っていればいつかトイレに着くのは、二ヶ月くらい前にトイレを探し回ったコスプレイベントに比べればマシだけど、何分我慢すれば良いのか分からないのは辛いよ。

「ひまり？ やっぱり顔色悪いよ、大丈夫なの？」

「……………だい、じよ、お、ぶ、っ」

うんちがしたいなんて言いたくない。

うんちが我慢できないなんて言えない。

けど、バスの中でこのままお漏らしなんてそれだけは絶対に嫌！千尋くんになんて言いたくはない。さっき家のトイレでうんちをしようとしたのに、その時は出なくて、今になって便意がぶり返してきちゃって我慢できなくなりそうなんて言いたくない。女の子として恥ずかしすぎるっ。でも……バスの中で我慢できなくなつて、立ったままショーツの中に大量のうんちをお漏らしなんて、その方がもっと恥ずかしいのは分かっている。

分かっている……言わなきゃ。

「トイレ……」

「え？」

「トイレ、行きたいのつ。うんつ、そのつ、大きい、方っ」

うんちしたい——って言いかけて、踏みとどまった。ここはバスの中、イヤホンをしている人が大半だけど、誰がわたしの声を聞いているか分からない。大学生にもなって「うんちしたい」は、さすがのわたしも恥ずかしさが勝つからね。小声で「トイレ行きたい」と言うだけでもかなり恥ずかしいけど。

「いや、でも家出る前にトイレは……」

「行っただけで出なかったの！ 今になったら急にしたく……っ」

ぐぼぼぼぼつぎゆるぎゆるぐぼぼぼつぎぼつ！

はあ、はあ、うんちしたい……っ！

うんちしたいうんちしたい、うんちすることしか考えられない！

どうしよう、トイレに行きたいのに。バスも全然動いてない。交差点で足止めを食らったまま、こっちの方向は青信号になっているはずなのに進まない。

「大学まで我慢できなさそう？」

「渋滞してると……無理、かも……」

「えー……そうなると、他にどこかトイレって……」

トイレ行きたいよお……。わたしの頭はもう動かなくなっちゃって、トイレでうんちをすること以外考えられない。頼みの綱は千尋くんの頭脳。千尋くんが引っ張ってくれる方向に、わたしは向かうしかない。

「駅前のバス停で一度降りよう。駅のトイレがあるだろ」

「あ、そっか……」

「確かトイレは改札の外にあったはずだから」

さっすが千尋くん、こういうときは頼りになる……っ。

大学に向かう道すがらにある駅は、もうしばらくで到着するはず。千尋くんの記憶通り、確か駅のトイレは改札の外に用意されているから、駅のバス停を降りてすぐに走れば一分も掛からずにトイレに行けるはず……それくらいなら我慢できそう。

お願い、早くバス、動いて——

「次は、○▲駅東口、○▲駅東口です。お降りの方は……」

頑張って耐え続けること四分。もしかしたらもう少し短かったかもしれないし、逆に長かったかも。よく分からないくらい、時間の感覚は麻痺しちゃったけど……わたしはうんちを我慢した。お尻の穴が熱くなって、大きなうんちに出口がこじ開けられそうになったけど、何度も何度も波を押し返して、うんちを我慢した。市街地に入っようやくバスは普段通りに走り出して、駅前の広場が見えてくる。ロータリーをぐるっと回って駅の目の前のバス乗り場にバスが停車した。

「すみません、降りまーす」

千尋くんが前の道を作ってくれて、わたしは後をついて行く。降り口でICカードをタッチして、バスの外に降りた。

すぐ目の前に駅の改札があって、すぐ横に公衆トイレっ！

「俺、ここで待ってるから」

駅前のベンチに腰を下ろす千尋くんを尻目に、走り出す。やっとうんちができる、ようやくうんちができる——

☆☆☆

「え——」

利用者数が一日に四千人ほどの、決して大きくはない駅にある公衆トイレもまた、お世辞にも広いものとは言えなかった。女子トイレにある個室は三つで、そのうち二つが洋式便器、残る一つが和式便器。駅の利用者は大半が朝晩の通勤通学ラッシュ時間帯のもので、千尋とひまりが駅に降り立った午前八時五分はまだ、ラッシュからピークアウトし始めた程度の時間帯。

故に、駆け込んだ女子トイレの個室が全て埋まっていることは、何ら不自然なことではなかった。

(並んでる……すっごく、うんちしたいのに……っ！)

ギューウウウッ！　ごろごろごろごろ……。

(ちゃんと並ばないと……大丈夫、きつとみんなすぐ出てくるよね) 便意が差し迫っていることなど他の利用者には知る由もなく、ぴたりと閉ざされた三つの扉の手前には、二人の女性が順番を待っていた。先頭はスーツ姿の女性、その後ろに並んでいるのは制服を着た高校生。ひまりが駆け込んだ直後には気づかなかったが、よく見ればどちらもお腹に手を当てている。

それ以上に特徴的なのは女子トイレの中の臭い。公衆トイレらしいアンモニア臭に混じって、微かな発酵臭が感じられる。

うんちがしたいのはひまりだけではない。そして個室の中にも、うんちをしている人がいる。

(早く……早く出てきてよっ、わたしだっとうんちしたいのっ！)

列は進まない。三つある個室からは物音すらもまともに聞こえてこない。ひまりを含めた三人は俯き加減でじつと順番を待つのみ。洗面台の鏡越しに映る姿を見れば、ひまりも、そしてひまり以外の二人も、便意を我慢しているのは明らかだった。

ようやく列が進み始めたのは、ひまりが列に並んでから一分近くが経過してからのこと。紙を巻く音、水が流れる音が連続して響き、開いたのは一番手前の扉——和式トイレの個室。それでもスーツ姿の女性は迷うことなく個室に入っていく、再び鍵が掛かる。扉が分厚いのか音は聞こえてこないが、きつと和式便器を跨いで大便をしているのだろう。

高校生とひまり、二人がじつと便意を我慢して順番を待っている。お腹の辺りにあるワンピースの布地をぎゅつと掴んで腹痛に耐えるひまりと、制服の上からお腹をさすっている高校生。どちらにもまだ救いは与えられていない。

ぎゅるるるるるる、くるくるくる、ごろごろ。

ゴロゴロゴギョルルルルルグウー……ッ！！

(うんちしたいうんちしたいっ！　前の子もお腹痛くて辛そうだけど、わたしだっとうんちしたい……!!)

ひまりの視線は中央と奥の個室に釘付けだった。扉に打ち付けられた白色のプレートに「洋式」と書かれているその二つの個室だけが、ひまりが使うことのできる便器。手前にある和式便器に興味はない。ひまりのお腹の中で蠢く大きな大便は、その二箇所の個室の中でしかひり出せない。

ぐるぐると音を鳴らしているひまりの下腹で、大便がゆつくりと出口に向かって動こうとする。ひまりが歯を食いしばり、お尻の穴を全力で引き締めて、巨大な質量の塊を押し返そうとする。重力に逆らい、生理現象に反旗を翻すその行為は、苦痛そのもの。小さな身長の背筋を精一杯に伸ばし、反らしながら尻の穴が広がってしまわないように、ひまりは肛門括約筋を引き締める。

（お腹壊してるわけじゃないのに、うんち我慢できないっ！早くうんちしてさせてよお、二箇所ともまだうんちしてるのっ!）

ひまりの背筋が伸びていくのとは対照的に、前に並ぶ高校生の背筋が曲がっていく。お腹を壊し下痢を我慢している彼女の直腸には、ひまりの腸内とは真逆に水分を大量に含んだ軟便が溜まっている。お尻を突き出し腹圧を少しでも逃がしながら、制服を汚すまいと必死に便意を我慢する姿が、ひまりの視界にも映る。

ひまりのトイレでの我慢が三分に達しようかという頃、やっと一つだけ個室が空いた。一番奥の扉が開き、似たような制服の高校生が顔を出す。先頭ですっと我慢していた女子高校生が猛ダッシュで個室へと駆け込んでいった。

（あの子、大丈夫だったかな。っ、人のこと心配してる場合じゃないよっ、わたしもうんち漏れそうっ、出そう……っ!）

ごぼごぼごぼ……ぐるるっ、ぐううっ。

（朝家のトイレだと全然したくならなかったじゃん！バス停まで走ったのが刺激になったのかもしれないけど、こんなにうんちしたくならなくてもいいじゃん!）

個室の外に残されたのはひまりただ一人。ひまりの前に並んでい

た二人は便器を確保した。あとはひまりが、個室が空くまで——ほぼ確実に、中央の個室が空くまで我慢をするのみ。

（いい加減出てくるよね!? うんちしてるのは分かるけど、わたしだってうんち我慢してるんだから替わってよっ!）

祈るように個室を見つめる。祈るように便意を我慢する。

——だが待てど暮らせど、扉に浮かんだ赤色は青色に変化しない。中央の個室は閉ざされたまま、その奥にある洋式便器が未だに先客の大便を受け止め続けている。ひまりがその場所に腰を下ろせる瞬間はまだ訪れない。

ゴロロロロギュギュルルルグググウウウウッ!!

「はっ、や——」

……ブッ! ブウー——ッ!!

にわかに高まる腹圧。ひまりが強烈な腹痛と共に、せりあがる欲求を認識したときにはもう、手遅れだった。尻の穴がほんの一瞬、数ミリだけ——けれども確実にこじ開けられ、中から高温高圧の気体が噴き出していく。汚らしい音、遅れて漂う強烈な腐卵臭は、他ならぬひまりの身体が生み出したもの。

鏡越しに映る自信の顔が赤くなっていくのを、ひまりは自覚した。（やつちゃった、おなら我慢できなかった……だ、誰も聞いてないよね? 他に誰もいないからギリギリセーフだよねっ!）

直後、また一人高校生がトイレに入ってきた。

間一髪とはこのこと。すでにひまりの放屁は止んでおり、微かに漂う臭いも、個室からの臭気と混ざり合って区別が付かない。

そして水が流れ、一つの個室が空いた。

(……和式。うんち、できない……)

中央の個室でずっと奮闘している誰かよりも、和式トイレに入ったスーツ姿の女性の方が早く用を足し終えた。流水音と共に開いた扉の奥にあるのは、ひまりが欲している洋式の便器ではなく、しゃがまなければならない和式便器。

(和式トイレ、イヤだ……うんちしたくない。洋式じゃないと)

「あの、わたし和式トイレ使えないので、どうぞ」

トイレに入ってきたばかりの女子高校生は素つ頓狂な表情を浮かべた。見るからに便意の我慢が限界そうな大学生が目の前にいるのに、便器が和式であるという理由だけで、トイレに入ることを拒絶している——和式トイレが当たり前のように使える高校生にはにわかには信じがたかったのだろう。

とはいえ、女子高校生も我慢できない何かを催していたからこそ、この公衆トイレに足を運んでいる。行使できる権利を使わない理由はないと言わんばかりに、「ありがとうございます」と言い残して個室へと入っていった女子高校生は、すぐに用を足し始める。

よほど大きな音が発せられたのか、最初の数秒間だけ、彼女の排泄音は個室の外にまで響き渡った。

「んんん……っ!!」

ブブブブリリッ! ブブブウウウ……ッ!!

甲高い放屁音。固形の大便がひり出されていく音と息み声。

個室の外に残されたひまりの心が弱く締め付けられる。和式トイレを使えばこんな目に遭わずに済むのに。今頃トイレですつきりと大便をしていたのはわたしだったはずなのに。

けれども現実是非情で、ひまりの元にはまだ便器がない。ゴロゴロと何度も鳴り響くお腹を宥めながら、お尻の穴を締め続けなければいけない。ここで折れてしまえば、千尋に便意を打ち明けて途中下車してまでトイレに駆け込んだ意味が皆無になる。

(うんち……我慢、がまん……っ! お願い早く出てきてよおっ!)
ブススッ、ブピッ! ぶぶぶ……っ。

(わたしだってうんちってしたい! うんちが漏れそうなのっ! お腹痛いわけじゃないけどうんちがしたいの……っ!!)

下痢のように一瞬の油断が致命傷になるわけではない。気を緩めても即座に致命傷を負うわけではない。

けれども、真綿で首を絞めるような巨大な固形便の便意は、じわじわとひまりの肛門括約筋の耐久力を削り取る。ずりっ、と僅かでも下に向かって動いてしまった塊は、もう何をしても上に押し戻すことが叶わない。便意の波は、現状の強さを維持するか、今よりも強烈になるかの二択のみ。

涙さえ浮かべながら、できる限りの力でお尻を締め上げ、祈るように扉を見つめ続ける。いつまで経っても錠前に浮かぶ赤色が青色に変わる瞬間は訪れない。

(うんち、もう、ダメっ……漏れる……げんかい……っ)

ひまりの脳内に「限界」の二文字が浮かんだ瞬間。

水が流れる音がして、ひまりは意識をそちらに向けた。和式トイレではない、洋式トイレで水が流れる音。ひまりの待ち望む便器が、ようやく空く瞬間が訪れる。

中央の個室から、十二分ぶりに中学生の少女が姿を見せた瞬間。

「空いた……っ」

ひまりは思わず口に出していた。開いていく扉の先に洋式の便器が見える。お腹を押さえながら出てきた中学生の様子も気にならないわけではないが、今はとにかく自分の便意だった。

素早く入れ替わって個室の中に入る。目の前にあるのは水を流したばかりの洋式便器。白くて、下水道と繋がっていて、そして座ることのできる場所。ウォシュレットも付いておらず、床は湿式のタイルで、安心して使える自宅のトイレや千尋宅のトイレ、大学のトイレにすら遙か及ばないトイレでありながらも、今は唯一頼ることのできる、大便ができる場所。

個室の中の悪臭も今は気にならなかった。先客たる中学生が長居し、その間ずっと下痢を絞り出した狭い空間は強い刺激臭に見たさている。普段であればきつと嫌悪の対象になるであろう場所。

だが、排便することで頭の中が満たされているひまりには、その全てがどうでも良いことだった。

（うんちっ、うんち、うんち、うんちうんちするっ!!）

壁に備えられたフックにリュックサックを掛ける。便器に背中を向けてワンピースを勢よく捲り上げる。タイツとショーツをどうに掴んで引きずり下ろしながら後ろに倒れ込む。

ブリブリブリブリブリブリブリブリブリブリッ!!

まだ生暖かさの残る便座に腰を下ろした瞬間、ひまりの尻は爆発を迎えていた。便座に腰を下ろしたという安心感が、便意を極限まで高めていく——お尻の穴を優しく広げていくような、普段の朝の排泄の仕方からはほど遠い、最初から全力での排泄。

「ううんっ！ うーんっ！ んぐうう……っ」

ブチュップリユプリユプリユビビビニチヂヂヂヂ——

（うんち出るっ、うんちでる、お尻いたいけどきもちいいっ）

小さな子供のようにひまりは息を吸い込み、大きな声とともに下腹に力を込めた。直腸に鎮座していた巨大な三日分の大便がゆつくりと降下を開始し、開かれた出口へと近づいていく。肛門括約筋が押し退けられ、焦茶色の塊が顔を出す。

——ミヂミヂミヂブリブリブリブリブリブリブリブリブリッ！

簾が外れたような排泄はまだ始まったばかり。直径にして二センチを超えている太さの大便が、小さな尻の肉を押し退けながら尻を飛び出し白い陶器へと着地していく。表面にヒビを生じるまでには至らずとも、岩のようにゴツゴツとしたそれは、ひまりの狭い腸内で丸々三日間に渡って水分を過度に吸収された代物。

ものの数秒のうちに十二センチほどがひまりの腸からひり出され外の空気に触れている。それだけでも同年代の女子の一度の排便量としては平均を上回る量。それでもまだひまりの下腹はぐるぐると音を立て続け、腸内に残存する質量の存在をアピールする。

（おっきいうんち出た……結構出たのに、まだうんちしたい、お腹ごろごろするっ、もう一度ううんってする……っ!!）

ニチチチチチチブリブリブリブリブリブリブリブリブリッ！

「うううっ、うううん……っ！ ふはあっ！」

どす黒い焦茶色から、明るい檜皮色へ。腸の奥からずるずると、一本の大便が引きずり出されていくにつれ、水分の量が増えて加速していく排便は、もう止まるところを知らない。

最大限の息み声とともに、ひまりは腸内にあった固形便の大半を一気に吐き出した。五秒ほどの間に、さらに十三センチもの長さの大便がひり出され、便器に着地する——太さ二センチ三ミリ、長さにして二五センチの巨大な大便。低身長ひまりの身体から生み出されたとは思いがたい巨大な大便が、洋式便器に沈んでいく。

(うんち……うんち、出たあ……まにあつた……といれ……)

頭の中が空っぽになり、脳内が真っ白く染まっていく。快感に身を任せ、数秒間はひまりの身体がびくりとも動かない。壁を眺めながらぼうっと、排泄の気持ちよさと、トイレに間に合ったという喜びを噛みしめるだけの時間。

——その時間がにわかに、終焉を告げた。

グギギギギギギ、ギュルッゴゴゴゴゴッ!!

(う……っ。おなか……っ、うんちしたのに、おなかいたい、っ)

お腹の奥底から響く鈍い音。固形の大便がゆっくりと出口に向かって移動していた際の鈍重な痛みとは全く違う、腸のあちこちを針で刺され、腸の管という管の全てを雑巾のように絞られるような強烈な痛み——この痛みには覚えがある。

身に覚えがありません。

(おなかいたい、っ、げりのうんちでる、うんちうんち——)

プビップチュブチュブチュビチビチビチブブブッ!

便秘をするようになる前——体が弱かった頃は、毎日トイレでこんな痛みと向き合っていた。一日に何分、いや何十分トイレで下痢を絞り出すために費やしたのか分からない。

その時と、全く同じお腹の痛みが、ひまりのお腹の中にあつた。

「うんちっ、はあっ、ふぐうっ! ぐううう……ううっ!」
びちびちびちびちびちやびちやばうう~~~~っ!

気持ちよさを孕んだ「う~~~~ん」とは似ても似つかない、お腹の中に巢食う痛みの元凶を絞り出すためだけに尻の穴を広げている、苦痛に満ちた声が響く。声に呼応するように、ひまりの尻から便器の中へと泥水のシャワーが降り注ぐ音が響く。

腹下しの原因に明確な心当たりはなかった。昨日の夕食に食べたお刺身が悪くなっていた? トイレに入るまでの我慢が長すぎたからその反動? 便秘が治った後にお腹が緩くなるのはいつも通り?

その一方で、怪しい心当たりはありすぎるほどだった。

(下痢ビのうんち一気に入らしたら、楽になった……けど、もう少しだけうんちしたい、かも)

お腹はまだ小さくゴロゴロと音を立てている。残便に決着を付けるためにひまりは最後にもう一度、お腹をさすり直す。

プビビビビッ! ぶうっ ぶびび ぶぶぶ~~~~っ!

多量的气体と、少しの泥状便。甲高い音と共に下痢っ屁を絞り出して、ひまりの排泄は——およそ九分間に渡る戦いは終わった。

(……早く出ないと、千尋くん待つてるし、一限遅刻しちゃう。

ウォッシュレットないけど、お尻ヒリヒリしないといいなあ)

使い慣れた自宅のトイレとはおよそほど遠い環境。硬いペーパーを巻き取ってお尻に当てると、泥のような黄土色の下痢がべつとりと紙に付着する。便秘がちで、ウォッシュレットの付いた清潔なトイレを選び好みすることの多かったひまりにとっては、何度も紙を取り替えて汚れを拭うのは久しぶりの感覚だった。

四度ほど紙を捨ててようやくひまりは立ち上がった。ショーツとタイツを穿き直して振り返れば、便器の中にはおぞましい光景。

（こんなに、いっぱい……下痢のうんちまで。我慢できてよかった）
ひまりの小さな左手がセンサーに触れ続けること二秒。封水に溶けきった下痢便と巨大な固形便が混ざり合った光景が下水道へと吸い込まれ、洋式便器は一〇分前と同じ光景を取り戻した。

個室を出ると、左右にある個室は閉まっっているが、順番を待っている人はいない。軽い足取りで水道に向かい、手を洗って女子トイレを出ると、千尋はベンチに座りスマホを弄っていた。

ひまりの姿に気づいた千尋はすぐにひまりの方へ駆け寄る。

「大丈夫だったか？　ちゃんと間に合ったか？」

「漏らすわけじゃないでしょ!?　わたしもう大学生だよ？」

「いや、だって、二ヶ月前……」

忘れもしない、コスプレイベント会場での大惨事。

それを出されてしまうとひまりも言葉が繋がらない。

「……まあ、間に合ったなら良かった。顔色少し悪いけど具合は？」

「うーん。ちょっとだけお腹ゆるくなっちゃった。今もお腹痛いわけじゃないから、平気だと思う」

「そっか。じゃあ、次のバス、あと二分で来るから乗るか」

およそ一八分間の寄り道を経て、ひまりの楽しい登校時間は再開する。結局三分遅延して到着したバスに乗り、二人は無事遅刻することなく大学に到着し、それぞれの講義へと向かう。

ひまりのお腹に小さな爆弾があることには、誰も気づかない。

十二月の冬晴れの空が、キャンパスを歩く二人を照らしていた。

慣れない下痢と、先客と。

なかよしひまりと昼うんち

あめもちうず

平日、正午、とある大学の第二食堂にて。

午前の講義を終えて昼休みに突入した学生で賑わう空間で、四人掛けテーブルでひまりたちは昼食を摂っていた。

今日も仲良し三人組、そしてもう一人ゲストを迎えて食事と歓談を楽しんでいる。

「でさー、そのとき彼氏が鼻息荒くしてさ」

ちよつと下世話な流れになるよね、と少し興味を抱きつつも周囲に聞かれていないか気になる——ひまりは二つの意味でも年頃で、箸で摘んでいた卵焼きをそつとお弁当箱に着地させた。

「それで、そのドラマのシーンみたいに押し倒してキスされたの！」

昨晚の情事を熱く語るのはひまりの友人である桜萌^{さくらもへ}。

金髪・派手なメイク・さらさらオーラ。常にお陽さまの下で踊っている派手な子。華美な見た目で人の目を、遠くまで通る明るい声で人の耳を、別け隔てない愛嬌で人の心を奪う。接点のない男子からも覚えがよく人気の大学一年生。

「無理やりベッド連れ込まれて、めっちゃ燃えた」。もう寝不足！」

当然、パートナーがいなくても……恋して勇気を奮った男子に桜が咲いたことはない。

「もう、桜萌ちゃんってば……。ご飯食べてるのにい」

そういった経験もなければ、勇気も出ない。ひまりは羨ましがりつつも、周囲の目が気になって矮軀を余計に縮こまらせた。

「桜萌さんってばオトナ」。日向子^{ひなこ}も見習いたうい」

お子様ひまりとは対照的に、そよ風を浴びた程度に受け流してサンドイッチを頬張る日向子。

「真似してもいいよ！ ひなちゃんは彼氏とどうなの？」

「日向子は彼氏いないよ」

さらさら黒い髪・おっとり美人の麗しフェイス・ゆるふわお嬢様の纏う空気感。手の届かなそうな高嶺の花に見えながら、『日向子さんの方から話しかけてくれていい雰囲気だった』『移動教室の場所わからなくて迷っていたら一緒に教室まで行ってくれた』『絵を描いてたら知ってる作品だったのか盛り上がりすぎて楽しかった』など……。高く止まらない優しい子というのが男子評。

もちろん男子の告白も止まらないが、今のところ日向子のハートを射止めた者はいない。

「いいなあ。日向子もムードばっちりなときに無理やり押し倒されたのかも」

パートナーなしと言っているが真偽は不明。この話をたまたま隣席で聞いた同期の男子がオラオラ系になりきって壁ドンしようとした結果、激しく罵られる悲話はあと三日後のこと。

「ひまりさんはそういうことされないの？」

「まだそういうの早いし、その、勇気がっていうかあ……じゃなくて！ なんでひまりに聞くの！」

今さっきまで頬に差していた朱が、赤に変わる。

「じゃあ別の人に聞こー。ひろくんは手を出さないの？ もしかして草食系？」

「手を出したら噛まれるんで」

「猛犬だ〜」

「ちょっと！ 答えなくていいの！」

しれっとパートナー事情を開陳したのは女子三人組に混ざって弁当をつつく男子、千尋。

「うちのチワワすぐにへそ曲げるんですよ」

「チワワでもないんですけど！」

実際大学生には見えない、小さいひまりがガルルと吠える。リアクションが面白いのであれこれ振られていることに本人は未だに気づいていない。

普段はひまり・桜萌・日向子の仲良し三人組でランチを摂っているが、たまに千尋が招かれて四人で昼食タイムになることがある。彼女が居るくせに人気女子二人と飯を食べている上に特に舞い上がっていないところが同期男子から三股男と憎まれる所以である。

「小学生レベルのお付き合いでヤキモキしているひろくんにちょっとしたご褒美をあげないとかわいそう！」

「マジ？」

「日替わり定食に敷かれてたパスタあげる。あーん」

「やったね。あーん」

「あー！」

揚げ物の油を吸ったパスタを器用に箸で巻取り、対面に座る千尋に差し出す桜萌。大きく口を開けて受け入れようとする千尋に、案の定ひまりが顔を真っ赤にした。

「間接キス!? だめだめ！ わたしの前でそんなの！」

「そこまで言うなら、ひまちゃんが何かあげれば？」

「ここでチューしちゃえ〜」

焚きつける桜萌、わなわなと震えるひまり、煽る日向子、げらげら笑う千尋。

桜萌も日向子も交友関係が広いため、三人が揃ってランチに憩う日は週に二回程度。だがお互いに大切な時間として都合をつけ、交友を深めている——親友同士。

「千尋くんは子供だから、まだ早いのに！」

「えー、ひまりさん厳し〜。日向子が彼女なら男の子のしたいこと、たくさんしてあげられるのにな〜？」

お嬢様然として、口の端が紡ぐのは小悪魔の囁き。

本人は本気ではないが、親友のひまりが狼狽えて、男の子の千尋が彼女の前でデレデレとする様を見たいのは本心——少しだけ舌を出して、尻尾をちらつかせて、

「いや、ひまり一筋なんです」

「へ〜……」

しれっと純愛を突きつけられれば、飛び出した舌も引つ込むもの。日向子は面食らってしまふ。

「も、もうっ。千尋くんってば、人前でそんなの恥ずかしいよ……」

「うーん、日向子反省するね」

「いつものことだから別にいいけど、過度に千尋くんをゆうわくするのだからね」

「私も彼氏とのエッチな話するの控えめにしよ！」

「それは無限に聞きたい」

「千尋くん!」

姦しい青春の一面は、輝かしくも取り戻し難い光を残して続いていくのだった。

それぞれ食事が終わり、だらだらと過ごして約一〇分。

「そろそろ解散しよっか」

少しそわそわしていたひまりが会話が途切れた隙を見て解散を切り出した。

三コマ目まで残り一五分。食堂も空席が目立ち始め、次の教室に移動して準備をする頃合いだ。

「ひまちゃんお便所行くよね」

「うん、もちろん」

「だよ。じゃあ一緒に行こー」

鞆を抱えた桜萌が尋ねると、ひまりが肯定。

ひまりは食後にトイレへ寄る習慣が染み付いているため、一緒にご飯を食べることの多い桜萌は当然それを知っている。ご飯を食べたらトイレに行く……安心のため無視できない癖に付き合う形で桜萌も同行することが多かった。

「日向子ちゃんはどうする?」

「えっと……じゃあ日向子も一緒に行こうかなー」

饒舌が落ち着いて聞き役に徹していた日向子は少し悩みつつも、首を縦に振った。

「ひまり、次の講義は一緒だよな。待つてようか?」

「ううん、先に行つて。うん——じゃなくて、大きい方したいか

ら、時間かかるかもだし」

「わかった」

こうして三人と一人は別れ、仲良し組は食堂を出てすぐの女子トイレ——には向かわず、階段を上がついていく。

ひまりの通う大学は歴史がある。言い換えれば年季の入った校舎が多い。古いところの女子トイレは個室数が少なかったり、洋式便器が少なかったりと今どきの女子には受け入れがたい環境のところが少なくなかった。

一方で利用している第二食堂がある棟は近年に新築されており、もちろんトイレだって乾式で衛生感がある。そして個室も全て洋式便器……。和式便器が苦手なひまりにとっては憂いなく目的地にできる数少ない場所だった。

更に二階は混みにくいというのもあり、ひまりの昼食後はもっぱらこの女子トイレで用を足すのが日常だった。

「空いてるね」

訪れた女子トイレは洋式便器の個室が一行に四部屋、それが向かい合わせに並ぶ計八室。化粧直しもしやすい洗面台を備え、今どきの需要を叶えた女子生徒の満足度が高いトイレの一つだ。

昼食後のピークタイムがちょうど過ぎた頃。五分前であれば満室だったところが、今は個室が四ヶ所も空いている。

洗面スペースと個室スペースはルートが分かれており、女子トイレ入口から空いた個室が見渡せる——右側の列は並びで三つ、左側の列は一つが空いている状態だ。

(よかった、我慢できないでうんちできる)

(やっぱりうんちしてる子がいっぱい……。空いてよかった)

小便も大便も同じ個室で済ませる女子トイレにおいて、利用者がどんな目的でドアを閉めているかは見てわからない。ただ女子特有の勘とトイレの雰囲気、それと一年生にして常連のひまりにはなんとなくわかるものだ。

使用中の個室四つの内三つが大便のために閉まっており、消音器の間隙を縫って固形物が落ちる音や空砲が聞こえていた。それとなく漂う大便臭と、それぞれがうんちを出すために息を潜める神妙な空気感。それに触れることで、

ぎゅるるるる ろろろろろ

(うんちしたくなってきた……)

ひまりのお腹が鳴り、ぐるぐると腹の中で泡が立つ。ひまりも、四日分の大便と確かな便意をお腹に秘めている。楽しい団らんの中にうんちがしたくなり、便意を無視できなくなって解散を切り出したのだった。

(やっぱりうんちするならここが一番快適だもんね)

他の子もうんちをしているという空間だと、自分の排便も許される気がしてちよつと心地が良い。

(混んでないし、他の子も同じだし、うんちしやすいね)

お腹のトラブルが日常だったひまりにとって、洋式トイレさえ使えれば雰囲気や清潔感は二の次。おしっこだけの子で教室最寄りの女子トイレが混んでいようと、泥と悪臭と薄暗さで気味の悪い屋外トイレであろうと、選り好みをする余裕はなかった。

(混んでないし、しつかりこもってうんちしょつと。桜萌ちゃんた

ちがこもらなそうなら大きい方するって言つて、先に行つてもらおうかな。でも日向子ちゃんは……)

昔に比べればお腹が強くなった(※ひまり基準)としても、気を遣うことなく大きい方ができるのは心の余裕が生まれるものだ。二人の親友もひまりのお腹事情を知つて優しく寄り添ってくれるので、友達と一緒にでも気兼ねなくうんちが言い出せる。

さて仲良し三人組は個室の前まで来ており、先頭を歩いているのは桜萌。

(並んでお便所できるし、こつちがいいよね)

友達と連れ立ってトイレに行くことが多い桜萌は迷うことなく並びで空いている右列に足先を向け、一番奥の個室へ。

(桜萌ちゃんなら安心だし、お隣行こつと。それに日向子ちゃんは離れた個室使いたい、よね)

続いてひまりがその隣に入室する。

「えつと……」

少し遅れて着いてきていた日向子が立ち止まり、左右を見る。左右二列のそれぞれに空室が一つずつ。どちらも清掃の行き届いた様式便器の個室で、大きな差はない。

(恥ずかしいけどひまりさんも、そうみたいだし、隣……)

少しだけ迷いを見せ、日向子はひまりの隣の個室に飛び込んだ。

可憐に青春を過ごす女の子たちが素に戻る花園に、ありのままを剥き出しにできる世界に三人。彼女たちに恋して、下心を見せる男子たちが想像もしない姿になることを許された壁の向こうで。

靴やリュックをフックにかけ、体温を吸った下着をそつと降ろし、

「んん、うん、ん、んう」

ぐぐぐぐぐぐ

にち みち にち にちち

持ち前の明るさと愛嬌でいくつかのグループを交友を深めてキャンパスライフを楽しんでいる桜萌だが、複数人交わって行動するゆえに彼女の快便体質とはやや折り合いが悪かった。

毎日、もしくは二日に一回、健康的なウンチをしつかりと催す。

自宅で済ませられれば満点だが、一日の行動時間の半分を大学で過ごす都合上、どうしたって不特定多数が利用する女子トイレで茶色いモノを垂れることは避けられない。

(私はウンチ恥ずかしいんだけどなあ)

「ん、んっ。んっ。ん」

友人との協調と共感を大事にする桜萌にとって、用便のために雰囲気悪くはしたくない。腹痛が極まれば不調を理由に無理せずトイレに行けるとしても、十分に消化されたウンチを自宅に持ち帰ることができればなら我慢を選ぶことも少なくなかった。

「ん。んっ。ん……！」

にち にち にちにちにち みちちちち

(あ、でる、でそう、いい感じのウンチ……！ 家まで無視できそうだけど、お腹ムズムズし続けて気になる便意を我慢しなくていいの、マジでホツとする……)

彼女の名に恥じない桜色の排泄腔から、黄色い大便が顔を出す。

表面にひび割れもなく過剰な水分に濡れていない、理想的なバナナウンチ。

「ん！ んっ、うんっ……んうっ！」

にちっ にち ぶりぶりぶりぶり……ばちゃん！

(出たっ。友達と一緒に仲良くウンチするの、気持ちいい……！)

息むたびにゆつくりと、だけど確実に。そして最後は自重でずるずる、ばちゃん。桜萌の引き締まったお尻から、つるんときれいなバナナウンチが便器に向かって落ちていった。

「はああ……」

(ウンチ、まだ出そう。時間もあるし、ひまちゃんたちというし、心置きなくこもっちゃおう！)

空気に圧される、洗面台で喋っている友達に気を遣う、気まずいまま気張る。そんな必要がないとわかれば、お腹も応えるもの。

ぐる ぐるるるるるるる ろろろろろろ

「ん、うん、んん。……んっ。んっ。んっ」

にち ぶり にちにちにち ぶりりり……

(周りほとんどウンチっぽいし、音消しはいいや)

節水対策として消音器が設置されている数少ないトイレだが、普段なら絶え間なく鳴らす疑似水洗音を桜萌は使わないようだ。心の底からウンチに没頭しており、

「うん、ん、んん。んう。ん……」

ぶりっ にち ぶす ぶすす にちにちにち……

「ん……っ」

ぶりにちちちちちっ！ ぶりぶりばちゃんっ！

ぶりぶりぶり！ ぶりゅっ！

ぶりぶりにちにちぶりゅぶりゅぼとっ ぼとぼとぼとっ

（はあ、めっちゃ出る……。しっかり息めてるから、ウンチのキレがいいかも。友達と一緒にするつとウンチするの、好きっ！）

一年生の中でも知名度・好感度ともに高いがためにやや八方美人なきらいがある桜萌。隣でウンチをしても寄り添い、許し合える友人はたった二人だけ。汚物を垂れる／それを知られることが許せるからこそ、普段も心から笑って楽しめる。

(ひまちゃんひなちゃんと過ごすの、やっぱ楽しいっ)

「うゝんっ、うゝんっ」

（おつ、ひまちゃん今日も元気に踏ん張ってるね。あれぐらい思
いっきりうーんってできたらもつと気持ちいいんだけど、さすがに
そこまでオープンにはできないかな？ でもひまちゃんが子供みた
いに踏ん張ってるのは、別に気にならないかも）

声を出すのは憚られるので短く息を吐く程度に留めているが、ひまりの踏ん張りに何か惹かれるものはあるようだ。

（もう少しですつきりできそう。ウンチ、がんばるぞ）

「ん、ん、うん。んっ、んん……ふうんっ」

男子の心を奪うキラキラ笑顔も、個室の中では幼氣に。今はただキャンパスライフの合間で生理現象に耽るただの女の子。

「うんっ、ん、んっ！」

ぶりつぶす ぶすぶすぶす

ぶりり
ぶり！
ぶりゆ
ぶりゆ
ぶりゆ
ぶりゆ
――

(ウンチ出る、大学のお便所で気持ちよくウンチ、もう少しっ)

「ん……うん、うーんっ！」

ぶりぶりぶりぶりぶりぼちゃん！ ぼとっ！ ぱちやつ

「ん……っ♡」

ぶりゆぶりゆぶりゆぶりゆりゆりゆりゆつ！

ぶりり　　ぶりゆ　　ぶりゆつ……　　ぼとつ

（はあ、スツキリ、っ♡ っぱい出た……！）

最後は細めで柔らかい便をどさどさと積み重ね、桜萌のお昼ウンチは終わった。

（久々に大学でスツキリできたかも。ひまちゃんたちといるときに
催せてラッキーっ）

一方で桜萌と相性がいいひまりは、

「うん、うーん、うーんっ。ううーんっ」

みぢぢぢ みぢ みぢ みぢぢ……！

（ぶら下がってるのにうち出切らないんだけど……。まだお便秘
四日目ののに、大物すぎる……）

桜萌がスッキリ快便した一方でひまりはまだ便器に茶色を落とせていなかった。

「おひまー! じいちゃん、うんちが我慢できないうんち」

うんちが我慢できないうんち」

念願の冬コミにコスプレ参加することになったひまり。

千尋と前泊することになったが、母親の謀略によってのホテルをツインルーム1部屋で予約されてしまう! 消灯後に凄まじい便意に襲われるが、部屋のトイレと千尋が近いのにうんちでできるはずがなく……? 表紙作品「お泊まりひまりと夜うんち」他、集まったひまラーが妄想した寄稿作品も収録。

存在してほしかった青春がここにある——お通じ報告パートナー・ひまりちゃんアンソロジー!

